

伊勢物語嬰兒抄

伊勢物語嬰兒抄 解題

本書は上下二卷からなり、既に未刊國文古注釋大系本に收められたものであるが、第四十八段より第九十段に至る三分の一を脱し、又校正も誤りが多いために、改めてここに翻印をするところである。

本書の底本は、讃岐高松藩主、松平家の披雲閣文庫藏本である。編者は昭和八九年の頃、披雲閣文庫を訪ね、諸本を調査した際に注目してゐたのであるが、校合の折を得ず、戦後、歸國の折を得て、筆寫し、この翻印をなし得ることができたのである。さてこの嬰兒抄は、縦二三糎、横一八・五糎、鳥の子綴葉裝、紺色の表紙にて、一面平假名交り十一行書寫、卷頭に披雲閣の藏印があり、江戸極初期の書寫と認められる。注目すべき傳本である。誤脱もなくはないが善本と稱すべきものであらう。ここにその誤脱は未刊國文古注釋大系本にて補ふこととした。他に天理大學藏本、神宮文庫藏本等がある。

この書の成立は、下卷の第百段の注に、

近年紹巴法橋ついぜんにしやうしつほつく、うへてみんなきをや思ふ忘草

とあり、紹巴の歿年は慶長七年で、七十六歳、門弟昌吒も慶長八年、六十五歳で歿してゐるので、紹巴の追善も慶長八年であらう。近年とあるによつてその頃と見るべきである。

又第六十九段に、

いまいづもの國つかさ、ほりをどの、彼もろなをのすへなり（高階氏）

とある。これは、堀尾吉晴をさしたものであらう。堀尾吉晴は、豊臣秀吉に仕へて、軍功があり、その後に徳川家康に仕へて、慶長五年九月關原の合戦にも武功があつて、戦後十一月、出雲隱岐兩國二十四萬石を領し、松江城を築いた人である。慶長十五年六月十七日卒といふ。その子、忠氏は慶長九年八月四日、二十六歳で歿してゐる。これによつて、この書の成立は、慶長五年以後なることは確實であり、その後、何年に成立したかは不明であるが、十年頃と見るべきであらうか。下巻の奥書に題名の事由が見える。

さてこの伊勢物語注の性質を窺ふに、その本文は、天福本とは異なる所があり、第五十四段に、「夢路をたどる」とある所を、天福本は「夢路をたのむ」とあると示し、第七十四段にも、「山はへだてねど」を、「山にあらねども」と天福本にありといひ、第七十五段にも、「世にあふことかたき女」を天福本には、世の字をかくなどがある。次にその注をみるに、古注を引用した段は、第九、第二二、第六九、第八〇、第八二、第九六、第一一一、第一二二などがあり、師説としては、第五、第一五、第一一六段があり、その他としては、牡丹花肖柏の説が第五段に、肖聞抄が、第七段、第一五段に、三條西實隆（逍遙院殿、三條殿、西殿など）の注が、第一五段、第二一段、第二二段、第二三段、第八一段に、稱光院殿（公條）の注が第一一段、第二二段、第二六段に、愚見抄の引用はかなり多く、第一五段、第三二段、第七七段、第八〇段、第八二段、第八四段、第八五段、第九六段、第九九段、第一〇六段、第一一〇段、第一一七段などにその引用がある。その他に定家の顯注密勘（第二三段）、なども引用せられてゐる。とくゑんの注が第二三段、第二四段にあるがこれは誰のものか不明で將來の研究にまたねばならない。宗祇の注が第七五段に引かれて居る。全體としては簡明平易であつて、慶長十年頃の伊勢物語の講釋の狀況を示す代表

的な注と認むべきであらう。なほ注目すべきは單なる注釋に終らないで、内容を他の文学（物語等）と比較評論した傾向があることで、俊成の歌を引用したり（第四段、第九段、第二一段、第五九段、第七九段、第一二二段）、定家の歌と比較したり（第九段、第一七段、第二一段、第三段、第六五段、第六八段、第八三段、第八七段、第九三段など）、又源氏物語と比較對照した所（第四九段、第五六段、第六六段、第七三段、第七七段、第八五段、第八七段、第九四段、第一〇二段、第一〇七段など）があり、大和物語と比較した所も（第九九段、第一〇五段など）あり、廣く鑑賞しようとする傾向が看取せられる。また本書には、古き物語の引用せられたものが幾つかある。例へば、第六段に、

土佐の國にさたじといふ寺あり。あしずりの寺とかけり。是をさた寺となづくることは、そのてらのちうち、弟子にいはく、我すでにとしおいたり。今は此寺をなんちにゆづりて、我はいかならん岩ほの中にこもりゐて、命のをはりを心しづかにまちなんといへば、弟子のいはく、我ようせうよりかた時ものはなれまいらせず、いかならん岩ほの中にもなづみ、水くみても御そばにこそあらめとなきしたふほどに、此僧よにまぎれてにげいでぬ。その弟子あしずりをしてなきまどふさま、まことにあはれなりとて、すなはちあしずりの字をかきて、さた寺となづけたる也。

とある。これは、「とはすがたり」の次の語と對照して面白い。「とはすがたり」には、

いかなるやうぞといへば、昔一人の僧ありき。この所におこなひてゐたりき。小法師一人つかひき。かの小法師じひをさきとする心ざしありけるに、いづくよりといふこともなきに、小法師一人きて、ときひじをくふ。小法師かならずわがぶんをわけてくはす。坊主いさめていはく、一度二度にあらず、さのみかくすべからずといふ。

又あしたのこくげんにきたり。心ざしはかくおもへども、坊主しかり給ふ。これよりのちは、なおはしそ、いまばかりぞよとて、又わけてくはす。いまの小法師いはく、このほどのなさけ、わすれがたし、さらばわがすみかへいざ給へ、みにといふ。小法師、かたらはれてゆく。坊主あやしくてしのびてみおくるに、みさきにいたりぬ。一葉の舟にさをさして南をさしてゆく。坊主なくくわれをすていづくへゆくぞといふ。小法師、ふだらくせかいへまかりぬとこたふ。みれば、二人のぼさつになりて、舟のともへにたちたり。心うくかなしくて、なくくあしずりをしたりけるよりあしずりのみさきといふなり。いはにあしあどとゞまるといへども、坊主はむなしくかへりぬ。

とあるのといづれが原型であらうか。

その他にも、古き物語として継子いちめの物語があり（第五〇段、第六一段）、又第一二二段には井手の物語（大和物語参照）がある。細部においては、誤もあるが注釋史上注目すべき傳本たることは疑ひのないものである。

終にあたり、本書の翻印を御許可下された披雲閣文庫當局に對して深く感謝する次第である。

昭和五十二年三月

高橋貞一 識

嬰兒抄 上

100

(一)

むかし男うぬかうぶりして、ならの京、春日の里にしろよしして、かりにいにけり。

一此物語のだんごとに、昔といふ字ををけり。是はその人の名、時代をもあらはさじとて、源氏物語に、いづれの御時にかと書いだせるとおなじ心也。ことに彼伊勢が家のしふにも何れの御時にか、大みやす所と聞えける御つぼねに、やまとに親有人ありけりとかきいだせり。我事なれども、かくおぼめきてかきいだせるさま、此物語によくあひにたり。

一男とはなりひら也。むかしおとこと、つゞけてはよまず。昔と、くをきりて、男うぬかうぶりしてとつゞくべし。また句を切て奈良の京よりかりにいにけりまでよむべし。又いはく、段ごとに昔と

よみきるとはいへど、さのみみゝにたつやうにはむやくなるべし。

一うぬかうぶりとは、かぶりのはじめ、ぞくたいのさだまる義也。なりひら一この事をかくゆへに、まづうぬかうぶりとかき出したる也。しかればうぬかうぶりして、奈良の京とつゞけてはよまざる也。うぬかうぶりして後、いつにてもならの京、春日のさとにちぎやうありければ、そこへたかりにゆくといふ事なり。

其里にいとなまめいたる女はからすみけり。このおとこかひまみてけり。

一なまめいたるとは、こびてうつくしきといふ事なり。長ごんかに、をもと人にかきおこされて、こびてちからなしと有も、うつくしく、たよくとしたるさま也。此こびてとあるも、なまめくも、

おなじ事とぞ。によへんにまゆの字なり。なをゑ
びす歌にくはし。

^引をみなへしなまめきたてるすがたをやうつくしよ
しとせみのなくらん。

^同秋の野になまめきたてるをみなへしあなかしがま
し花も一とき。

一はらからとは、おとしいなり。

一かひまみとは、ものゝひまよりほのかに見たる
也。かきのひまよりみたる心ともいへり。されど
もそれはあまりかたし。たゞもののひまよりがよ
きなり。

おもほえず、ふるさどにいとほしたなくて有ければ、
こゝちまどひにけり。

一おもほえずはおぼへず也。おもひもよらずの心也。
一はしたなきとは、にあはざる事也。たとへば上ら
うなどの、たちいあら／＼しきをも、はしたなき
といふなり。源氏物がたりに、此ことばおほ

し。それはところによりて心かわる也。きりつば
の巻に、いとほしたなき事おほかれど、かたじけ
なき御こゝろばへのたぐいなきをたのみにてまじ
らい給ふと有は、あいそふなき事どもおほけれど
ゝ云事也。又おなじ巻に、えさらぬめだうの戸を
さしこめ、こなたかなた心をあはせて、はしたな
めわづらはせ給時もおほかりとあるは、あざむき
なんぎさするといふ事也。又おとめの巻に、雲井
のかりのめのとが、夕ぎりの御事を、ものゝはじ
めのろくあすくせよなどいひて、つぶやくを聞給
ひて、かれ聞給へ、我をば位なしとて、はしたな
むる也と、ゆふぎりののたひしは、いやしむると
云義也。かくところによりて、すこしづゝ心かわ
ると思ひ給ふべし。かやうにあればたる所に、
うつくしき上らうなどの有は、にやはざるといふ
義なり。

^引さもこそは夜半のあらしのあらからめあなはした

なのまきの板戸や、これもにあはざるといふ義也。

一こゝちまどひにけりとは、はやれんぼの心なり。

たゞしかゝるふるさとに、かやうにうつくしき人のあるは、いかなるゆへぞとふしんしたる心ともいへり。されどもけんじは、木々の巻に、扱世にありと人にしられず、さびしくあはれたらんむぐらのかどに、思ひのほかに、らうたげならん人の、とぢられたらんこそ、かぎりなくめづらしくはおぼへめ、いかではたかゝりけんと、思ふよ리가へることなん、あやしく心とまるわざ也とあるも、此こゝろ也。しかれば、れんぼの義となをしるべき也。

男のきたりけるかりぎぬのすそをきりて、歌をかきてやる。其おとこ忍ぶずりのかりぎぬをなんきたりける。

一かりぎぬのすそをきりてとは、そのきぬに歌をかきたるにはあらず、うたかきたるたまづさに、そ

のきぬを切て、そへてやる也。すなはち忍ぶずりのかりぎぬなれば、我心のみだれたるは、かくのごとしとみすべきためなり。しのぶずりの事、むかしみちのくしのぶのこほりに、うつくしきもんあるいし有。夫にむらさきのねをすりつけ、そのいしにきぬをおしつければ、うつくしき文できたる也。それをしのぶずりのきぬとはいへり。

春日野のわかむらさきのすりごろも忍ぶのみだれかぎりしられずとなん。

一歌のこゝろはじよか也。まづ所なればさすが野、とよめり。むらさきは、かすが野に有草なれば、春日ののわかむらさきのすりごろもといひつげたる也。下句は、そなたをしのぶ心のみだれは、かぎりなしと云義也。次の詞となんとよみきるべし。但此ともじもうたにつゞけてはよむべからず。かぎりしられずとよみきりて、又どなんとよむべし。

をいつきていゝやりける。ついでおもしろきことゝも
や思ひけん、

みちのくの忍ぶもじずりたれゆへにみだれそめにし
我ならなくに

といふ歌の心ばへ也。昔人はかくいちはやきみやびを
なんしける。

一 おひつきていひやりけるとは、人などをゝふ心に
はあらず。やがてといふ心也。世上におつつけて
などいふにおなじ。

一つみでおもしろき事とは、此歌はふる歌なれど
も、此歌の返事によくさうたうしたりといふ事を
つみでおもしろきといへり。

此歌はかわらの左大臣とをるこうの、女によみて
やり給いしうた也。その心は、忍ぶもじずりのや
うに、心のみだれたるはたれゆへとか思ふらん。
そなたゆへにこそみだれたれ、我心にてはなきぞ
とよみ給いし也。それをいまの女のかへり事にす

る時は、しのぶもじずりのやうにはたれゆへにか
みだれそめ給いし、我事にては有まじき物をと、
心をもちいかへたる也。きめうなるさくたるべ
し。こかをかへりうたにもちひる事、そのたぐひ
おほし。源氏物語にも、うつせみのはにをく露の
木がくれてしのびゝにぬるゝ袖かな。是は伊勢
が歌也。しかれどもげんじの御歌に、うつせみの
身をかへてけるこのもとにとあそばしつる、その
返歌によくかなひたればにや、うつせみのはにを
く露とかきたる也。

一 といふ歌の心ばへ也とは、かく心をもちいかへた
る事、きどくなりと、伊勢がほめたる詞也。われ
ならなくにと、此との字もうたにつゞけてはよま
ず。といふ歌の心ばへなるべし。

一 むかし人は、かくいちはやきみやびをなんしける
とは、是もいせがほめたることば也。いちはやき
とは、さつそく也。はやき心也。みやびとは、な

さけといふこゝろ也。昔人はかやうに、はやくと歌などをよみかわす事のかしこかりしよとほめたる也。又いはく、みやびとはかぜのすがたとかけり。きやしやふうりうなどいふ心也。又なさけといふ義也。源氏若なの巻に、此君はものゝみやびふかくとゝのへ給ふ人といへり。又同巻に、三日のほどはかのみんよりあるじの御かたへいかめしく、めづらしきみやびし給ふといへり。

(二)

昔男有けり。ならの京ははなれ、此京は人の家まださだまらざりける時に、にしの京に女有けり。

一ならの京ははなれ、此京は人のいへまださだまらざりける時とは、仁王四十三代の御門、げんめい天王より四十九代、くわうにん天わうまで七代は、奈良のみやこにましゝけるを、くわんむ天わうの御時、ゑんりやく三年に、山城の國がおかへうつり給ふ。これすなはちにしの京也。其後

東の京をこしらへ給ひて、ゑんりやく十三年に、此ひがしのきやうへうつり給。その間の事なるべし。そのことを此京は人のいへまださだまらずといへり。

一にしの京に女有けりとは、ひがしはしゆびせざるにより、よき人はいまだにしの京にありし也。

その女世人にはまされりけり。その人かたちよりは心なんまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。

一世人にはまされりけりとは、まづかたちをほめたる也。次のことばに、心なんまさりたりけるとは、まず世上に有人よりはすぐれたりと、かたちをほめて、又かたちよりは心なをまさりたりとかけり。これ人をほむるに、じやうぼんのほめやうなりといゑり。又いはく、世人と有を、公家がたにては、のもしをくわへて、よの人とよめる也。そのゆへは、ごうだの院のしんわうのとき、御いみなを、世人と申たるゆへ也。又ごさがの院の御

いみ名を國人と申しかば、時の人、四しよ五經い
げいづれのしよじやくにも、國人と有をば、國民
とかうしやくせられしなり。萬事にそのきづかひ
有事也。

一ひとりのみにもあらざりけらしとは、ぬし有人と
聞へたり。こちらには、二條のきさきとかけり。

しかれども此物がたりに名のあらわれたるはぜひ
におよばず、名のあらはれざるを、これかかれか
などたづねとふこと有べからずと也。わかによみ
人しらずと有ごとしと思ふべきなり。

それを彼まめ男、うちものがたらいてかへりきて、い
かゞ思ひけん、ときはやよひのつみたち、雨そぼふる
にやりける。

おきもせずねもせでよるをあかしては春のものどて
ながめくらしつ。

一まめ男とは、なりひら也。じちなるおとこといふ
義也。色このみの名にたてる人を、じちなるおと

こと云へる事、そのしきひあるべし。この人は、
かぶのぼさつのけしんなれば、しゆじやうさいど
のはうべん、その心はかりがたし。よくくしり
よ有べき事也。次のことばに、かへりきて、いか
ゞ思ひけんとは、あかずこひしきなるべし。

一雨そぼふるにやりけるとは、春雨しづかにふり
て、物かなしきに思ひあまりて、一しゆをおくら
るゝにや、その時節のあはれを、ぎんみすべし。

一雨そぼふるのふもじにこりてよむべき也。新古今
に、春雨のそぼふる空のおやみせでおつる涙に花
ぞちりける。是はしづかなる春雨のてい也。たゞ
しあられそぼふる、時雨そぼふるともあれば、た
ゞふる事なるべし。いやひ引このおのれ神さび青雲
のたなびくひそらあられそぼふる、いく山引の木、
くれなゐにそめぬらんそぼふる時雨けふもまなく
に。

一おきもせずねもせずとは、此歌は戀のうたに取て

はこんごだうだん、心行所めつの歌也。よるはおきもせずねもせであかし、ひるはつくぐとながめくらすと也。春は長雨のふる物なれば、ながめくらすに、ながあめのこゝろこもれり。戀の歌よまん人は、わがこつずいをすてゝ、此歌をすへんぎんぜよと、俊成もていかも仰られし也。又はいく、ながめはなげきの心也。古今物の名に、いまいくか春しなければ鶯も物はながめて思ふべらなり。

(三)

むかし男有けり。けさうじける女のもとにひじきもといふものをやるとて、

思ひあらばむぐらのやどにねもしなんひじき物には袖をしつゝも

二條のきさきのまだ御かどにもつかうまつり給わで、たゞ人にておはしける時の事也。

一けさうじけるとは、思ひをかくる事也。なりひら

より二條(の后)へひじきといふかい草をまいらせらるゝとて、そのひじきをたち入てよまれし歌也。然ばこのひじき、まへのことばにはにぐるべし。歌の時は、しもじをすむべき也。此五もじ、思ひあらばとは、思ひなくてあらばといふ義也。思ひなくてあらば、むぐらのやどに袖をしきて成とも、ねんものをとなり。又一ぜんの御せつには、しんじつの思ひあらば、むぐらのやどに袖をしきて成とも、その人とかたらんにはうかるまじきとの義也。萬葉の歌に、何せんにたまのうてなもや、やへむぐらはへらんやどにふたりこそねめ、是本歌也。なりひらの歌を本歌にて、新せんざいしうに、思ひあれば涙にそでくちはてぬむぐらのやどに何をしまし。又新古今がけいの歌に、たへてやは思ひありともいかゞせんむぐらのやどのあきの夕ぐれ、此歌はたとひ思ひなしとて、むぐらのやどのさびしさには、かんにん成間

敷きとよめる也。然ばがけいの歌、なを此心によ
くかなへるよししでんなり。次の言ばに、二條の
きさきのたゞ人にておはしましける時の事とは、
きさきの御あやまりをちんじて、伊勢がことはれ
る也。げにも此君十七の年、五節のまひ姫にたち
給。入内は廿六の御年なれば、もつともその比は
たゞ人にて有べき也。

(四)

昔ひんがしの五條におほきさいの宮おはしましける、
にしのたいにすむ人有けり。

一ひんがしの五條とは、ひがしの京の五でう也。お
ほきさひは、そめどの也。そめどのゝまします御
所のにしかたのたいに、二條のきさきまします
と云事也。

それをほいにはあらで、心ざしふかゝりける人、ゆき
とぶらひけるを、む月の十日ばかりのほどにほかにか
くれにけり。

一ほいにはあらでとは、ほんいにはあらで也。なり
ひらの心のまゝにはあらざる也。又いはく、ほい
にはあらでとは、しのびくといふ事也。あらは
にはあらでといふ義也。すゝきなどのほにいづる
といふも、あらはれいづる心也。古今の歌に、あ
きの田のほにこそ人をこいざらめなどか心にわす
れしもせん、この歌の心なるべし。但まへのほん
いのぎまさるべきと也。なりひらこゝろざしふか
くて、たびくまうできたれるを、世のきこへを
おぼしめすにや、正月十日比に、御ざ所をかへ給
を、ほかにかくれにけりといへり。

有所はきけど、人のいきかよふべき所にもあらざりけ
れば、なをうしと思ひつゝなん有ける。

一そこにましますとはしりながら、かよふべき所な
らねば、なをうしとおもふ也。此なをのじに心を
つくべし。さきくもきさきのなさけなかりし御
こゝろを、うしつらしと思ひわびしに、今は御あ

たりへさへ参りかよはねば、猶うしとおもふ也。

またの年のむ月に、むめの花ざかりにこぞをこひて、
いきてたちて見いてみれどこぞににるべくもあらず。

一又の年はあくるとし也。正月の比みやこのはなざ
かりに、こぞまいりかよひし事を思ひいでゝ、あ
りし御所へ参みれど、いさゝかなぐさむ心なく、
こぞにかわる也。

うちなきて、あばらなるいたじきに、月のかたぶくま
でふせりて、こぞを思ひいでゝよめる。

一あばらなるいたじきとかけるは、かならずあれは
てたるにはあらず。主のなき所は、物さびしくあ
ればてたるやうなる物也。とをるのおとゞはて給
ひて後、こんみんのおとゞ其門をすぎ給ふとて、
うちつけにさびしくもあるかもみちばもぬしなき
やどは色なかりけりとよめるもこの心なり。

月やあらぬ春や昔のはるならぬ我身ひとつはもの
身にして

とよみて、よのほのくとあくるに、なくく歸りに
けり。

一此歌、なりひらの歌の中にも、よにすぐれ、はな
はだこゝろふかき也。まづ五もじにあまりのかな
しさに、月は見し世の月にてはなきかと、月をと
がめて、月やあらぬとよめり。さて次のことば
に、春をとがめて、春も昔のはるにてはなきかと
也。さてもあやしや、わが身のうれさは、もとの
まゝなる物をと、思ひのせつなる心、まことにお
ろかなることばにては、いひつくしがたし。しゆ
んぜいのきやうも、此月やあらぬと、手にむすぶ
水にやどれる月かげ、この二しゆをなんかんじ給
ひしとなり。よくくぎんみすべき事也。

(五)

昔おとこ有けり。ひんがしの五條わたりに、いとしの
びていきけり。みそかなる所なれば、かどよりもえい
らで、わらはべのふみあけたるついちのくづれよりか

よひけり。

一ひんがしの五でうとは、東の京の五條也。みそかなる所なればとは、おんみつの所なれば、かどよりはいらで、ついひちのくづれよりかよふ也。ついひちのいの字を引て、いともひとときこへぬやうによむべし。古今には、かきのくづれよりとあり。

ひとしげくもあらねど、たびかさなりければ、あるじ聞つけて、そのかよひちに夜ごとに人をすへてまもらせければ、いけどもえあわで歸りけり。

伊せのうみのあこぎがうらに引あみも度かさなればあらわれにけり。

この歌の心これにひとし。あるじはそめどの、后也。

人しれぬ我がよいちのせきもりはよひくごとのうちもねななん

とよめりければ、いといたう心やみけり。あるじゆる

してけり。

一うたにべちの儀なけれど、かよいちのせき守うちもねよかしと思ひわびたる心あはれふかし。人しれぬの五もじ、我といはんため也。數ならぬ身などいふ心也。此歌をそめどの、聞給いて、心やましくあはれみ給ふといふ事を、いたう心やみけりとはいへり。あるじゆるしてけりも、ばんをゆるすにはあらず、あわれみたまふ心をゆるすとはいゑり。

二條のきさきに忍びてまいりけるを、世のきこへ有ければ、せうとたちのまもらせ給ひけるとぞ。

一これもそめどのよりおほせらるゝにより、二條の御兄弟しうより、人をいだしてまもらせらるゝ成べし。又いはく、ゆるしてけりのけもじ、おほかたにこるべしといへり。但しせつには、すむべしとあり。のどのこうりんいんの、又ぼたんくわなども、すみてあそばされし也。

(六)

むかし男有けり。女のえうまじかりけるを、年をへてよばひわたりけるを、からうじてぬすみいで、いにくらきにきけり。

一 えうまじきは、ゑがたき女といふ事也。からうじてとは、やうくにしてぬすみ出たる也。しんらうのしんの字を、からうとよむ也。此だんも二條の御事なるべし。

あくた川といふ河をみていきければ、くさのうへにおきたりける露を、かれは何ぞとなん男にとひける。

一 あくたがわの事、きん中にちりをながす川なり。

みてゆくはつれ行也。草のうへの露なども見なれ給わぬにや、かれはなにぞとひ給ふなり。

ゆくさきおほく、夜もふけにければ、おに有所共しらで、神さへいといみじうなり、雨もいたうふりければ、あばらなるくらに、女をばおくにをしいれて、おとこ弓やなぐひおいて、とぐちにおり、はや夜もあけ

なんと思ひつゝ、あたりけるに、おにはやひとくちにきてけり。

一 ゆくさきおほくとは、行末のとをき也。道いそぐとて、おとこ御いらへおも申さぬていと也。そのよかみなり雨ふりければ、ゆく事かなはざるにや、あれたる座敷のあるに、女をばおき参らせて、男はとぐちにありて、けいこしたるてい也。

その時なりひらは、こんゑつかさなれば、弓矢なぐひおいてとあり。こんゑづかさ、何事にてもきん中にさはがしきことあれば、弓矢なぐひにて、かんなりのおんにしこうするものなり。おにはやひと口にくいてけりとは、すへの言ばにみゆ。人のとりたるを、さてはおにのくいたるよと、中將おもひさはがれしたういをかきたる心、もつともおもしろし。此所に色々の儀あれども、いらざること也。

あなやといひけれど、神なるさはぎに、えきかざりけ

り。やう／＼夜もあけ行に、みれば、あてこし女もなし。あしずりをしてなげどもかいなし。

一あなやといひけれどもは、女のあゝといひつらむを、われは神なるさはぎにきかざるかと也。あしずりをしてとは、女をうしないて、中將のもだへられたるさま也。長ごんかに、玄宗しよくの國より御かへりの時、やうきひのはてたまへるべくわいがはらにて、なげき給いし有様を、爰にいたつてちうちよしてさることあたはずといへり。是もちうちよとは、あしずりのさま也。又源氏かげろふの巻にも、手ならひの君をうしないで、めのどがしたひなきしにも、おさなかりしほどより露心おかれ奉る事なく、ちりばかりもへだてなく手ならひたるに、今をかぎりのみちにもわれをおくらかし、けしきをだに見せたまわざりけるがつらきことゝおもふに、あしずりといふ事をして、なくさま、わかき子のやうなりと有。又もんぜんにさ

たとしてふしまろぶといふことあり。此さたの字もあしずり也。又いはく、土佐の國にさたじといふ寺あり。あしずりの寺とかけり。是をさた寺となづくることは、そのてらのうち弟子にいはく、我すでにしおいたり。今は此寺をなんちにゆづりて、我はいかならん岩ほの中にもこもりゐて、命のをはりを心しづかにまちなんといへば、弟子のいはく、我ようせうよりかた時もはなれまいらせず、いかならん岩ほの中にもなづみ、水くみても御そばにこそあらめとなきしたふほどに、此僧よにまぎれてにげいでぬ。その弟子あしずりをしてなきまどふさま、まことにあはれなりとて、すなはちあしずりの字をかきて、さた寺となづけたる也。あまり事多く候へ共、ついでにかき侍也。

白玉かなにぞと人のといし時露とこたへてきへなましものを。

一此うたの心、まことにあはれ也。草のうへの露を何ぞととはれしとき、露にて侍とこたへてすなはち我もきえまし物を、そのとき御いらへさへ申さで、何しにいき残りけんとかうくわいのさま也。

これは二條のきさきのいと子の女御の御もとにつかうまつるやうにてお給へりけるを、かたちのおとめでたくおはしければ、ぬすみておいて出たりけるを、御せうとほりかわのおとゞ、たらうくにつねの大なごん、まだ下らうにて内へ参り給ふに、いみじうなく人有を聞つけて、とゞめて取かへし給ふてけり。それをかくおにとはいふ也けり。まだいとわかうて、きさきのたゞにおはしける時とや。

一いとこの女御とは、染殿のきさき也。ちうじんこうとながらの卿とおとゞい也。そめどのちうじんの御子、二でうの后は、ながらの御子也。然ばいと子也。二條の后わかくおはせしとき、染どの御そばにをき給いし也。それをなり平ぬすみ

ていづるを、いたうかなしみてなきたまへば、此君の御兄弟しう、まだ下らうのうんかくにて、だいいりへ参給ふに、これを聞つけて、とりかへし給へるを、なりひらの心に、おにの取たるかと思ひさはがれしを、まへのことばにあり／＼とかきたるなり。まだいとわかうてとは、このきさき二十六の年、じゆだいし給ふ。それいぜんのことなればなり。せうとはあにのこと也。またおとゞをも云事あるか。たらふくにつねも、ほりかはのおとゞも、みなながらの御子也。然るを、ちうじんこうに御子のなきゆへ、ながらの卿の二郎君、ほりかわをやしなひ給へる也。ほりかわのおとゞは、はやく大臣になり給ふゆへ、おとゞなれどもさきにかくなり。

(七)

むかし男有けり。京にありわびて、あづまにいけるに、伊勢をはりのあはひのうみづらを行に、なみのい

としろくたつをみて、

いとゞ敷過行方のこひしきにうら山敷もかへる浪哉
となんよめりける。

一此だんよりさせんをかきいだせる也。思ひ有てみ
やこをいつる人は、さもあらぬ草木の色もめにつ
きなみかぜのおともあはれなるべし。いとゞみや
この方の戀しきに、白浪のよせてはかへりく、
心のまゝなるを、うら山敷とよめる歌也。心をよ
くつくべし。せうもんにいはいはく、あさくときこ
ゆる歌に、なをこゝろをつくくべしとなり。

(八)

昔男有けり。京やすみうかりけん、あづまのかたに行
て、すみ所もとむとて、ともしとする人ひとりふたりし
て行けり。しなのゝくにあさまのたけにけぶりのたつ
を見て、

しなのなるあさまのたけにたつけぶり遠近人のみや
はとがめぬ。

一さきのだんに、京に有わびてとかきて、このだん
には、京やすみうかりけんとはばかりかきて、何ゆ
へのさせんともあらはさず。もつともおもしろ
し。ともしとする人ひとりふたりとは、わうめいに
そむきて都を出るひとの、物さびしく、たづきな
きさまもつともなり。遠こち人とは、あなたへ行
人、こなたへ行人の事也。あさまのたけのけぶり
のふぜひ、是おもしろしともあはれとも、みとが
めぬ人やはあるべき。何れもおもしろしとは見と
がむべきか。思ひなき人は、たゞおほかたに見た
るにや、我は思ひゆへ身にしてみて、あはれにおぼ
ゆるかといふ心を、れいの心あまりてことばたら
ざる歌也。かんけの御歌に、ゆふされば野にも山
にもたつけぶりなげきよりこそもへそむるなれと
あり。

(九)

昔男有けり。その男身をえうなきものに思ひなして、

京にはあらじ、あづまのかたにすむべきくにもとめにとて行けり。もとよりともとする人ひとりふたりしていきけり。みちしれる人もなくてまどいいきけり。

一 此だん上におなじ。身をえうなき物とは、おもふこともかなはざれば、みやこに有てもせんなしと也。朝夕にみべき君としたのまねば思ひたちぬる草枕也。此心同前か。又源氏かしは木の巻に、いはけなかりしほどより思心ことにて、何事をも人に今ひとときはまさらんと、おほやけわたくしのことにふれつゝ、なのめならず思ひのぼりしかど、その心かなひがたかりけり。ひとつふたつのふしごとに、身をおもひおとして、こなたなべての世のなかすさまじうなりてとあり。此心ひとしかるべし。ひとつふたつのふしとあるも、まづは女三の宮のおもいかなはざればといふ心也。みちしれる人もなくてとは、なりひらもともなふ人もみなる中ぶあんないといふ義也。

三河の國八ツはしといふ所にいたりぬ。そこをやつはしといひけるは、水行川のくもでなれば、はしを八ツわたせるによりてなん八橋とはいひける。

一 はしを八ツわたせるとは、このかわ水たてよこながるゝによりて、はしをかずゝわたしたる也。物の數の多き事をば、やちよのつばき、くひのやちたびなどいふがごとし。うちわたしながき心は八はしのくもでに思ふことはたへせじ。この八ツはしをよめるうた也。

そのさはのほとりの木のかげにおりあて、かれないひくひけり。

一 かれないひとは、ぞくにほしいひなどいふものか。たゞしたび人のそじきのていか、古今ぎりよのぶに、たちまの國のゆへまかりける時に、ふたみのうらといふ所にとまりて、夕さりのかれないひたうべけるとあり。又かうとく天王の御子、ありまのわうじの御歌に、いゑにあればけにもるいひを草

枕たびにしあればしめのはにもる。たびの有さま
かやうにかけるならひにや。

そのさにかきつばたいとおもしろくさきたり。夫を
見てある人のいはく、かきつばたと云五もじを句のか
みにすへて、たびの心をよめといひければよめる、
からごろもきつゝなれにしつましあればはるゝき
ぬるたびをしぞ思ふ

とよめりければ、みな人かれいひのうへになみだおと
してほとびにけり。

一心はあきらか也。歌のさま、きつゝといひ、つま
しはるゝ、みなころものゑんなり。つねの歌に
取ては、しうくおほくしてあしかるべし。是はか
きつばたといふを折句にをくほどに、かくよまで
はかなはざると也。大方のたびなりとも、かなし
かるべきに、いはんや跡に思ふ人を残し置て、み
やこを出たる事なれば、一しほかなしきとよめり。
一かれいぬ涙にほとびたるなどいへる、げにもほし

いひとみへたり。

ゆきくゝて、するがのくににいたりぬ。うつ山にい
たりて、わがいらんとする道は、いとくらうほそき
に、つたかへではしげり、物心ぼそく、すゞなるめ
をみると思ふに、す行しやあいたり。かゝるみち
はいかでかいまするといふを見れば、見し人也けり。
京にその人の御もとにとて、ふみかきてつく。

するがなるうつの山邊のうつゝにも夢にも人にあは
ぬ成けり。

一つたかえではしげり、このはもじ、てにをはによ
むがよき也。つたかへでときりて、はしげりとよ
む事わろし。

一すゞなる目をみるとは、ていけつにまじはり、
せんとうに袖をつらねし身が、いま田舎でんかのちりを
分まよふ事、まことにふりよのぎと云ふこゝろ
也。すゞろは則ふりよとかく字也。又かんじよに
は辛からきのじをよませたりといへり。又座の字もかく

なり。

一す行者、たれともなし。こちうにへんぜうなど云
ぎもちいず。

一かゝるみちはいかでかとは、す行者なりひらをみ
て、かうやうのでんじやへは何とて御くだりぞ
と、おどろきたるさま也。

一みれば見し人なりけりとは、すぎやう者をみたま
へば、なりひらのしる人也。是によつて文をこと
づてたまふなり。

一歌のこゝろは夢にもあはぬといはん爲に上句をば
いへり。うたの心は、うつゝの事はいふにおよば
ず、夢にも人にあはぬといへり。あはぬ成けりと
いひつゞけたる所おもしろき也。しゆんぜいな
ども、此所をほうびせられしと也。

ふじの山をみれば、さ月のつごもりに雪いとしろうふ
れり。

時しらぬ山はふじのねいつとてかかのこまだらに雪

のふるらん。

その山はこゝにたとへば、ひえの山をはたちばかりか
さねあげたらんほどして、なりはしほじりのやうにな
ん有ける。

一このうたは、ふじの山のめいよをいひたてたる
也。但この歌の五もじ、もつともあはれふかし。

このまへのことばに、すぐろなるめをみることに
思ふと有。父はへいぜいの御子、あほうしんわう
也。母はくわむの御子、伊藤ないしん王なり。た
のしみさかへたぐひなかりし身の、けふかくおち
ぶれたる有さま、まことにくわふくみちをおなじ
うし、じやうすいたな心をかへすがごとし。じん
りんにかぎらず、心なきさうもくまでもさかり
有、おどろへあり、いづれかそのあはれをのがれ
んと思ひつゝ行おりふし、ふじの山を見れば、さ
月のつごもり、はやみな月にかゝれるに、雪いと
しろし。さてはふじの山ばかり時しらぬよとよみ

いだしたる五もじ也。まことにあはれふかし。よくぎんみすべし。かのこまだらとは、雪のむらゝなるてい、かのこのなつげのほしのごとく也。

一その山は爰にたとへばとは、みやこへ歸京の、ちの物語ときこゆ。ひえの山を廿ほどかさねあげて、なりはしほじりのやう也とあり。このしほじりの事、人たづねばしらずといひてやみなんと、俊成ていか父子ともにかたくをしへたましいと也。もつともしゆせうなり。

なを行ゝて武藏國としもつふさのくにとの中に、いとおほきなる川有。それをすみだ河といふ。其川のほとりにむれいて思ひやれば、かぎりなくとをくもきにけるかなと、わびあへるに、わたしもり、はや舟にのれ、日もくれぬといふに、のりてわたらんとするに、みな人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるおりしも、白き鳥のはしとあしとあかき、しぎの

おほきさなる、みづのうへにあそびつゝ、いをゝくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。わたしもりにとひければ、これなんみやこ鳥といふを聞て、名にしおはばいざこととはん都鳥我思ふ人は有やなしや

とよめりければ、ふねこそりてなきにけり。

一すみだ河、むさし下ふさ兩國のさかひ也。しもつうさ、このつもじをにこりてよむ人もあれど、たゞすむべき也。ふさの字つふさときこゆるやうに、つの字を引てよむべし。

一川のほとりにむれゐてわびあへるさま、尤あはれふかし。都は日々にとをざかり、ゆくゑいづくともしらざるに、みやこに思ふ人々のことゞも語いでゝなきあへるに、わたしもり心なくて、とくのり給へ、日もくるゝにといそぐさま、誠にさあるべしとおぼえてをかし。

一しぎの大ききなるとは、はしとあしとあかき鳥の

しぎよりすこしおほきなるといふことなり。

一うたべちぎなし。この鳥のなをとへば、都鳥といふあいだ、わが故郷思ひいで、一しほなつかし。

さてはみやこのこともしるらん、我おもふ人は何事なくて有やなしやといざとひてみると、たはむれてよみし歌也。

一ふねこぞりてなきけりとは、此歌をきゝてふねのうちの人々みなさしあつまりてなくてい也とぞ。

又源氏手ならひの巻にも、みめも心ざまもむかしみし宮こ鳥ににたるはなし。何事につけても、世中にあらぬ所は、これにやあらんとぞ、かつはおもひなられけるとあり。是も此歌のあはれさをおもひよせてかきたるなるべし。

(一〇)

昔(男)武藏の國までまどひありきけり。扱そのくに、ある女をよばひけり。父はこと人にあはせんといひたるを、は、なんあてなる人にこゝろつけたりける。

一この女たれともなし。よばひわたるとは、心をかよはずぎ也。父はなを人にてとは、ぞくしやうもなく、なをくしき人といへり。平人の心也。さあるによつて、なりひらなどを我がむこにとらんはくわぶんなりとて、しんしやくしたる義也。

父はなを人にて、母なん藤はらなりける。さてなんあてなる人にと思ひける。

一このは、はふちはらうちなれば、心たかくおもひあがりて、我がむすめをば、なりひらにあはせまいらせたきといふ心を、あてなる人に心つけたりけるとはかける。あての字は、すぐるゝの字、たつときといふ字、またあたるといふ字をもかくといへり。とかくじんじやうなるとほめたる心也。このむこがねによみておこせたりける。すむ所なんいるまのこほりみよし野、里なりける。

みよし野のたのむのかりもひたぶるに君がゝたにぞよるとなくなる。

一むこがねとは、むこきりやうといふ義也。よきむ

こかなとほめたる心也。源氏乙女の巻に、あかしの上の事を、かういふさいはひ人のはらのきさががねこそ、又おいすがひぬれ、たちいで給つらんに、ましてきしろふ人有がたくやと、うちのおとゞの給ひしきさがねも、おなじ心也。歌の心は、みよしのゝたのみに有かりも、一向に心は君がかたによるゝとこそなけと、我身をかりになしてよみたる歌也。ひたぶるは一向にといふ義也。ひたすらにといふ心也。またながくと言永の字をもかく也。いるまのこほりはむさしの國也。そこにみよしのといふ所あり。又やまにも丹後にもみよしのはあるなりとぞ。

むこがねかへし、

我かたによるとなくなる御吉野のたのむのかりをいつか忘れん

となん人の國にてもなをかゝることなんやまざりけ

る。

一我方によるといへる、それこそ本望なれと、母のこんせつをよろこびていへる也。いつか忘れんといふ所この歌のさく也。此心ざしをば、いつの時に忘れん、わすれまじき物をといふ心也。又このつらさをば、いつか忘れんなどいへるは、とくわすれたきと云義也。ことばはひとつにて、心のかはる事おほかるべきなり。人のくにゝてもとは、他國にてもかくかうしよくの事やまずといへり。是作者のことば也。他國にては用しや有べき身にてと也。

(一一)

むかし男あづまへ行けるに、友だちどもにみちよりいひおこせける、

忘るなよ程は雲井に成ぬとも官行月のめぐりあふまで。

一拾遺第八には、たちばなのたゞもとが歌と有。せ

うみやう院殿おほせられしは、なりひらの歌を、
 たちばなのたゞもとがひとのむすめのもとへかき
 をくりたるときこへたり。時にあひぬれば、人の
 歌をも、わが歌のやうにてかきをくる事ためし
 おほき事なればとおほせられし也。此義おもしろ
 し。歌の心はべちぎなし。しるすにおよばず。

(一一)

昔男有けり。人のむすめをぬすみて、武藏野へゐて行
 ほどに、ぬす人なりければ、國のかみからめられに
 けり。女をば草むらのなかにおきてにげにけり。みち
 くる人この野はぬす人なりとて、火つけんとす。女
 わびて、

武藏野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我も
 こもれり

とよみけるを聞て、女をばとりてともに出ぬにけり。
 一此だん誠につくり物がたりときこへたり。國の守
 にかからめらるゝとは、むさしの國つかさどがめあ

はむる也。せぞくにいふしばかりからむる事にはあ
 るべからず。みちくるとはまんの字也。人あまた
 おひきたる心なり。野に火をつけてたづねんとい
 ふをきゝて、女のよめる歌、もつともあはれふか
 し。つまもこもれり我もこもれりとは、なりひら
 も我も爰に有とよめる也。若草のつまといふ事有
 にや、かくよめるを聞て、女をもとり、なりひら
 をもともにいざなひ歸るといふ心を、女をばとり
 てともにゐていにけりとかけり。此歌、古今に
 は、春のてうばうの歌とかきて、五もじをかすが
 のとはかへたり。つくりものがたりなれば、かく
 すこしづゝことばかはりたる事おほかるべし。

(一二)

昔むさしなる男、京なる女のもとに、きこゆればはづ
 かし、きこえねばくるしとてかきて、うはがきに、む
 さしあふみとかきておこせて後、おともせず成にけれ
 ば、京より女、

むさしあぶみすがにかけたたのむにはとはぬもつ
らしとふもうるさし

と有をみてなんたへがたきこゝちしける。

一きこゆればはづかし、きこへねばくるしとある
は、ふみのことば也。おもふ心の程をかきつくす
もはづかし、又申さぬもくるしきと也。むかしの
人はあなをほりて、我思ふ事をいひぬれたるとや
らん、ふるきふみに見へたり。またいはく、思ふ
事はぬこそはらふくるゝわざなれともいへり。

さてうはがきに、むさしあぶみとかけるは、さす
がにかけてたのむといふ義也。かくるもさすがも
あぶみのゑんなるべし。又あぶみにさすかねとい
ふものあるなり。またいはく、あぶみはむさしの
めいふつなれば、むさしあぶみといえり。かづさ
しりがいなどいふこゝろなり。

一のちおともせずなりにければとは、此文のちお
とづれなかりしと見えたり。さておんなの歌に、

あなたのうはがきを、すなわち五もじにもちい
て、ことばのゑんなれば、むさしあぶみすがと

つづけたり。あだなる人なれば、かならずたのむ
にてはあらねども、さすが思ひきられぬぞといふ
こゝろを、さすがにかけたたのむとはよめり。さ
ればとい給はぬもつらし、またしのぶなかなれ
ば、(しげく)とひ給ふもうるさしとよめり。な
りひらこのうたをみて、さてはなにとしてそなた
のきにはあふべきぞとたへがたきこゝちしけるな
り。

とへばいふとはねばうらむ武藏あぶみかゝる折にや
人はしぬらん。

一歌の心は、とへばとふといふ、又とはねばうらむ
ると有。しむたいこゝにきはまれり。さてなにと
すべき事ぞ、人のしぬるといふ時、かやうにやく
るしかるらんといふこゝろを、かゝる折にや人は
しぬらんとよめり。おもしろき歌也。

(一四)

むかしおとこ、みちのくににすゞろに行いたりにけり。そこなる女京の人はめづらかにやおぼへけん、せちに思えるこゝろなんありける。扱かの女、

中／＼に戀にしなすはくわごにぞなるべかりけるたまのをばかり

うたさへぞひなびたりける。さすがにあはれとおおもひけん、いきてねにけり。夜ふかく出にければ、女、夜もあけばきつにはめなてくだかけのまだきになきてせなをやりつる。

一すゞろに行いたりけりとは、心ならずゆくなり。とまりさだめぬたびのていをかけり。せちにおもえるとは、やるかたなく思ふ心也。歌さへまことにひなびたり。かなはぬ戀せんよりは、しぬるにまじたる事あらじとおもへど、それもしなれずは、ちぎりふかきくわごになりたきとうらやむ也。くわごになりたきとうらやむ也。くわごはち

ぎりふかきなり。一とせをすごさぬものなれども、そのあひだなりともといふ心をたまのをばかりとよめり。この歌万葉には、てにをはすこしかわる成、しるすにおよばず。また古今に、しぬる命いきもやすると心見に玉のをばかりあはんといはなん、このたまのおも、そとばかりといふ心也。人のいのちを玉のおといふも、みじかきことのたとへなり。次のことばに、うたさへぞひなびたるとは、女のこゝろのごとく歌さへみ中びたる也。

一夜ふかく出にけりとは、心もとまらずとくかへるなり。源氏すへつむの巻にも、何事に付てか御こゝろもとまらん、夜ふかくいで給ふとあり、同心也。

一きつにはめなてとは、きつねにくわせたきといへり。ねの字りやくしてきつにといへり。かけとはかけいにて、家には鳥なり。それをみちの國く

だかけといふ也。くだかけはちいさきとりといふこゝろなり。里中^引に鳴なるかけのよびたてゝいたくはななかくれつまかも。

といえるに、男京へなんまかるどて、

くり原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて思ひけらしとぞいひをりける。

一歌のこゝろはあねはの松のやうに、ぬしなき人ならば、みやこへさそわん物をと也。つとはとさん也。山づとはまつともいゑり。たとへばおさなき人のみやげなどいへるがごとし。

一といへりければ、よろこぼひてとは、なりひらの歌を聞て、女よろこぶ也。思ひけらしとぞいひをりけるとは、扱は我を思ひ給ふよといひいたるさま也。よろこぼひてに、くをきりてよむべし。古今のあづまうたに、

^{引歌} おくろざきみつのこじまの人ならば都のつとにいざといわましをと有。

(一五)

むかしみちのくににて、なでうことなき人のめにかよひけるに、あやしうさやうにてあるべき女ともあらず見えければ、

一なでうことなきの事、ぐけんにも、せうもんにも、人をあなどりかろしめたる事とあり。三條殿はほめたることゝの給へり。

師説にいはいはく、なでうことなき人のめとは、なにごともなんなきをんなといふ心也。ひとに心はなし。女をほめたるばかりなり。すなはちこのすへのだんにこともしも女どもとかけるもなんなき女どもといふこゝろなり。

一あやしうさやうにてあるべき女どもあらず見へければとは、なりひらののたまふとて、たやすふなびくべき女ども見へざるなり。あやしうは所によ

りて心かわるが、こゝにては、かるやすくの心也。

忍ぶ山しのびてかよふ道もがな人の心のをくも見るべく

一歌はさうさもなきやうなれども、見所あり。忍びてかよふみちもがなといふは、人の心の中へしのびてかよふ道のあれかしといふ也。しからば人のこゝろをくを見るべき物をとなり。古今、思ふてう人の心のくまごとに立かくれつゝ見るよしもがな。

女かぎりなくめでたしと思へど、さるさがなきゑびす心をみてはいかゞはせんは。

一女かぎりなくめでたしと思へどは、女も此歌をあはれとめでたる也。さるさがなきゑびす心を見てはとて、あはれとは思ひながら、わろきゑびす心にかくいひかよいてはのちいかならんとなり。いかゞはせんはのもじやすめ字と也。また

いはく、さがはあくの字也。おそろゝとかくともいふ。又つまびらからずとかくともいへり。とかくゑびす心とは、物にあやかりやすく、又はむかたなくわりなくこはき心也。

(一六)

むかしきのありつねといふ人有けり。三代の御門にかうまつりて、時にあいけれど、のちは世かはり時うつりにければ、世のつねの人のごとくもあらず。

一三代のみかどゝは、じゆんな仁明文徳三代なり。

此間はあるつねのおぼえよく、しゆつとうせられし事を、時にあいけれといへり。文徳第一の御子、これたかの御母は、きのなとらがむすめ、ありつねがいもうとなれば也。これたかくらゐにつき給はゞ、ありつねいよくおぼへたるべきを、第二の御子、これひとくらゐにつき給へば、紀氏はおとろひたるといふ事を、世かわり時うつりにければ、よのつねの人のごとくにもなきといふこ

となり。おほかゞみに、藤氏がさかふるほどに、紀氏はかれんとてかなしめると有。そのころ京はらはの歌に、大急だこへて又こゑてどうたひし也。あんのごとく第一の御子、これたかをこへて、これひとくらゐにつき給ひしなり。これひと、申は、その比のくわんぼくちうじんこう、よしふさの御むすめ、そめどのゝきさきの御はらなり。人がらは心うつくしうあてはかなることをこのみて、こと人にもにず。

一ありつねのほんじやう、いかにも心うつくしう、きしやふうりうなる事をのみこのむといふことを、あてはかなることをこのみてといへり。あてはかみ(ぎ)にいへるごとく、すぐるゝといへる勝の字、又たつときといふきの字をもよむ也。又いはく、あてはかなる事をこのむとは、たゞふうりうにしてはかなき花もみぢ、あしたの露、よるの雨に心をそむるさまなり。

まづしくへても、なを昔よりしときの心ながらよのつねのこともしらず。

一世上の人は、とみさかへぬればおごり、まづしくおとろへぬれば、人をへつらひなどするを、このありつねはさもあらず、むかし世にありし時のごとく、せいへんの事おもしろず、あかしくらすといふ義也。ろんごにいはく、まづしうしてへつらう事なく、とんでおごる事なくんばいかんとあり。

とし比あひなれたるめ、やう／＼とこはなれて、つゐにあまになりて、あねのさきだちて成たる所へ行を、おとこまことにむつまじき事こそなかりけれ、

一此心は、ありつねかくおとろへ行ほどに、女もつゐにあまになりてたちわかるゝさま也。とこはなるゝとは、つねをはなる也。ふうふは二世とかけたれば、いつまでもあひそふべき中を、身のまづしきにより、かくたちはなるゝことを、とこは

なるゝといへり。とこはつねといふ字なり。あねのさきだちてなりたる所へゆくとは、此女のあねも、それよりさきに世をいとひ引こもりたると見へたり。きうぢ、いづれもおとろへたるていあはれ也。

一男まことにむつまじき事こぞなかりければ、いへひんなるによりて、いさゝかてうあいのしるしをも見せず、心をのべさする事もなかりしよと、かへらぬ昔をくひ、たゞ今のわかれをかなしみていゑる事なり。

今はと行をいとあはれと思ひけれど、まづしければ、するわざもなかりけり。思ひわびてねんごろにあひいかたらいけるともだちのもとに、かうくいまはとてまかるを、何ごともいさゝかなることませでつかはすことゝかきてをくに、

手を折てあい見しことをかぞふればとをといひつゝ、よつはへにけり

一いまはとゆくおとは、はやたちいづれども、いさゝかのはなむけをもすべきやうなし。あまりのかなしさに、ともだちの本へいひやるとは、なりひらはあるつねがむこなり。歌心はべち義なし。ゆびをゝりてかぞふれば、はや四十年あひそひたりといふことを、とをといひつゝよつとはいへり。それにさへ別るゝかなしき、思ひやり給へといふこゝろこもれり。

かのともだちこれを見て、いとあはれと思ひて、よるものまでおくりてよめる、

年だにもとをとてよつはへにけるをいくたび君を頼みきつらん

一かのともだちはなりひら也。よるものまでといふにて、さまぐの物をおくりたると聞へたり。

歌の心は、年だにもはや四十ねんあひそひ給へば、そのあいだたがひに思ひかわし、たのみをかけしこと、いかばかりかわと思ひやり侍る。その

人にはなれ給へるかなしき、まことにいはんかた
なしといふころこもれり。

かくいひやりたりければ、

これやこのあまのはごろもむべしこそ君がみけしと
奉りけれ。

一此五もじむつかしき也。なりひらの心ざしをまこ
とにかたじけなく思へば、さながら天人のはごろ
もをゑたるかといひなせるなり。これやこのと
は、これはたゞあまのはごろも（よとよみなした
り。そのはごろも）をちやくすれば、けふよりし
ては我女とかろくしくは思ふべからず、てんし
へ御衣をさゝぐる心におもひなして君がみけしと
奉りけれとよめり。みけしとは御衣とかけり。

よろこびにたへでまた、

秋やくる露やまがふと思ふまであるはなみだのふる
にぞ有ける。

一よろこびにたへでは、一しゆにてもことたらぬ

とて、又よめる也。あきやくるとは、あきは物か
なしき折なれば、にわかにあきの來りて、我が袖
をぬらすかと思ひまどひ、又野山の本草の露が所
をまがふて我袖に來りたるかどたゞいまのなみだ
のふりおつるあはれをよめる歌なり。

（一七）

とし比おとづれざりける人の、さくら花イのさかりに見に
きたりければ、あるじ、

あだなりと名にこそたてれ櫻花年イにまれなる人も待
けれ

一此だんにむかしといふ字なし。かきをとしたる
か。またとし比にてむかしをもたせたるか、作者
の心はかりがたし。此歌、古今にはよみ人しらず
とありて、春のふに入て、戀のうたにあらず。爰
の心は年ごろおとづれざりける人はなりひらな
り。花はあだなる物となにたちたれども、まれ
くにくる人をもまちつけたる花なれば、あだな

らずといふ也。この（女）なりひらにもとあひた

る時、女をうたがひて、あだ人といひしを思ひい

で、我身を櫻になして、さくらばあだならずと

よめるなり。

返し、

けふこずはあすは雪とぞふらなましきへずはありと

も花とみましや。

一女花のあだならぬことばかりをいへば、又それを

をしかへして返歌也。けふ我來りたればこそ花を

も見つれ、あすにもならば、花も木ずへをさり、

雪のごとくに木もとにちりしきてあるべし。たと

へきえずして有とも、こずへをさりてのちは、は

などとは見らるまじきと也。下の心はけふ我きたり

たればこそ、そなたおも見つれ、あすにもよそへ

うつろふならば、たとひあい見たりとも、我つま

とは思ふべきかわといふころ也。是を本歌にて

定家、庭引のおもにきへずはありとも花と見る雪は

春までつぎてふらなん。

（一八）

むかしなまごころ有女ありけり。男ちかう有けり。

一なま心とは、すこしなりひらへれんばの心あるな

り。これこじんいろくのせつをかき給へども、

何れもいらざること成。おとこちかうありけりと

は、女のあたりにおとこのいへもある也。

女、歌よむ人なりければ、心見んとて、きくの花のう

つろへるを折て、おとこの本へやる。

紅ににほふはいづら白雪の枝もとをくにふるかとも

みゆ

一女、歌よむ人なればとあるは、小町といへり。此

物語に人の名それとあらはすことは、おほからね

ども、なりひらなどのあたりにて、歌よむ人など

いはんは、小町ならではたれをかいふべきと思

ふ儀なるべし。きくをおりうたにそへて、なりひ

らの心を引みたる也。歌のころは、そなたは色

このみと聞つるが、さもあらず、此花を見給へ、
たゞ枝もたはむまで白雪のふりかゝりたるやうな
り。此ごとくそなたのこゝろ何の色もなくまじら
なる人也とよみたる歌也。

男しらずよみによみける、

くれなゐににほふがうへの白菊は折ける人のそでか
ともみゆ。

一しらずよみによめるとは、女のなま心有て、よみ
おこせたりとはしりたれども、それをばしらずが
ほにてよみたる也。此菊のかたへはくれなゐにう
つろひ、又しろきもかさなりたるうつくしさは、
おりける人の袖のにはひもかくやとこそ見侍れど
よめるなり。花見つゝ人まつ時は白妙の袖かとの
みぞあやまたれける。

(一九)

むかしおどこ、宮づかへしける女のかたにごたち成け
る人を、あいしりたりける、ほどもなくかれにけり。

一宮づかへしける女とは、なりひら、そめどのゝき
さきに宮づかへのころ也。女のかたにとは、みや
づかへしけるしうのかたといはんと也。

一ごたちとは、その御かたにめしつかはるゝ女房達
なり。なりひらはちうじん公のけらいなれば、染
どのへまいらるゝこともつともなり。かれにけり
とは、男の方よりかれゝゝになりたる也。

おなじ所なれば、女の目には見ゆるものから、男は有
物かとも思ひたらず、女イ

一おなじ所なればとは、同宮のうちなれば、たがひ
に見かはすなり。男はある物かとも思ひたらずと
は、むつかしきことばなり。これおとこの心にあ
らず、女の心になりひらの我をば有物かともおも
わぬよと、女の思ふこゝろ也。

あま雲のよ所にも人の成行かさすがにめには見ゆる
ものから

一あまぐもとは、天の雲なり。よそとつゞけんため

なり。くもは目には見ゆれど、よりそはぬ物なれば、業平をあまぐもにたとへてよめる也。なり行かとは、成行かな也。

とよめりければ、おとこ返し、

あま雲のよ所にのみしてふることはわがゐる山のかけはやみ成

とよめりけるは、又男ある人となんいひける。

一此ころはあまぐものごとく、よそにのみあることは、そなたの山の風のはやきによりてと也。そ

なたのかぜとは、又おとこある人と也。古今第十五、なりひらのあそんきのありつねがむすめにす

みけるを、うらむること有て、しばしの間ひるはきて、夕さはかへりのみしければ、此歌をよみて遣すとありける返し、なりひらのあそん、行歸り空にのみしてふることは我ある山のかぜはやみなり。かくはあれども、ありつねがむすめのこと、ていちよの名をあらわしてかきたれば、この

儀ふしん也。されどもありつねがむすめおほし。いづれにてかあらん。しかればこの物がたりは、たれとも名をあらはさでかけのなみにして見るべきなり。

(二〇)

むかしおとこ、やまとに有女を見て、よばひてあいになり。扱ほどへて宮づかへする人なりければ、かへりくるみちに、やよひばかりに、かへでのみみぢのいとおもしろきをおりて、女のもとに道よりいひやる、

君がためたをれる枝は春ながらくこそ秋の紅葉しにけれ

一やまとにある女とは、ならの京の女か、又このだんは、伊勢がことゝもいふせつ有。それにあいて、またてうかの宮づかへにのぼらるゝ事也。やよひばかりの紅葉とは、わくらばとて、やよひ卯月の比もうつくしく、あかき木の葉あり。それを折て女のかたへやりしなり。歌(の)こゝろは、

是見給へ、そなたのためにおりたれば、このかへでもはやあきの紅葉のやうにうつろひたり。されば人の心もうつろふべきやらんといふこゝろをふくみてよめり。おもしろし。

とてやりたりければ、返事は京につきてなんもてきたりける。

いつの間にうつろふ色のつきぬらん君が里にははるなかるらし

一京につきてとは、みちよりいひやりて、いまやくくとみかへりて返事をまちたるていなり。いつの間にうつろふ色のつきぬらんとは、男の歌をうけて、我ために折給ふとて、もみちすべきいはれなし、とかくそなたの里には、うつろふあきの色ばかり有て、春などはなきにや、さていつのまにうつろひたるぞと、かへつ(て)をとこをねたみたる歌なり。

(二二)

昔おとこ女、いとかしこくおもひかわして、こと心なかりけり。さるをいかなる事かありけん、いさゝか成事に付て、世中をうしと思ひて、いでゝいなんとおもひて、かゝるうたをなんよみて、物にかきつけける、出ていなば心かろしといひやせん世の有さまを人はしらねば

とよみをきていでゝいにけり。

一をとこ女いとかしこくおもひかわすとは、ふうふねん比におもひかわす也。しかるをすこしのことをうらみて、歌をよみおきていでゝいにし也。うたのこゝろは、我いでゝいにし也、我いでゝいなば、心かろき物と人やいひなさん、ふうふの中のうらみ有ことは、人のしらねばとよめるなり。

一よの有さまといふは、世中のことをもいふ。又我身ひとつのことを、我世のいたくふけにける哉とよみしうたも有。爰に世といへるは、ふうふの中の事をいへる也。

この女かくかきをきたるを、けしう心をくべきことも
おぼへぬを、なにゝよりてかかゝらんと、いといたう
なきて、何方にもとめゆかんと、かどにいでゝ、とみ
かうみ見けれど、いづこをはかりともおぼへざりけれ
ば、かへりいりて、

思ふかひなき世なりけり年月をあだにちぎりて我や
すまいし

といひてながめおり。

一 けしうこゝろおくべき事もおぼへぬおとは、女の
歌を見て、男のいへることば也。

あやしやなに事のうらみにて、かくいゑをばいで
しぞと、おとこのなくさまなり。けしうとはあや
しうといふ義也。

一 かどにいでゝとみかうみみけれどとは、爰かしこ
見るさま也。

一 いづこをはかりともおぼへざりければとは、いづ
くにあるべきともおぼへねば、我やにかへり入

て、歌をよむ也。うたのこゝろは、此女は思ふか
ひなし、我年月あだにはちぎらざりし物をといへ
る心也。さりながら、さやうにみれば、女のとが
にのみいひなして、歌の心あしかるべし。にしど
のゝ御せつには、思ふかひなき世なりけりと女を
うらみて、たゞし年月心にはおぼへねども、我が
あやまりや有つらんと、身をうたがいたるこゝろ
なり。是なりひらのほんいにありて一しほしゆせ
うなるべしとおほせられしなり。よくく吟味す
べし。

人はいさ思ひやすらむ玉かづらおも影にのみいとゞ
見えつゝ。

一 此歌のこゝろは、いさとは、人はしらずといふこ
ゝろ也。女は我をおもひやすらん、おもはずやあ
るらん、いざしらず、我はおも影に見えてこひし
く忘れぬものおとよめるなり。

一 玉かづらは、女のかくるものなれば、女によそへ

たり。玉かづらおもかけとつゞけたる事、万葉におほく有也。

一思ひやすらふといふばかりにて、おもわずやあるらんもこもれる也。さればかりうの歌に、又や見んまたや見ざらん白露のたまぬきしける秋はぎの花とよめるを、またや見んにて、又や見ざらむはこもるべきものをと、すこしこゝろを取したるや(おとり)うに定家卿のの給いしなり。俊成の歌に、またやみんかたのゝみのゝさくらがりはなの雪ちる春の明ぼの、このうたも又や見んの五もじにて、またや見ざらんはこもれる也。このこゝろよろづにわたるべき也。

この女いとひさしくありて、ねんじわびてにや有けん、いひをこせたる、

今はとてわするゝ草のたねをだに人のこゝろにまかせずもがな

一ねんじわびてとは、思ひわびて也。一度いゑをい

でたらば、そのまゝにてもあらずして、またなりひらの戀しさにこらへわびて、歌をよみおこせる也。

一歌のこゝろは、いまははや我を忘れたまふらん、なりひらの心に、わすれぐさのたねをまき給いそかし、忍ぶ草のたねをまき給へかしといふ心也。

返事、

忘れ草うふとだにきく物ならば思ひけりとはしりもしなまし

一なりひらの返歌也。うたの心は、忘れ草うふるうへぬなどいふは、おもふ人の心にこそ其きたも有べけれ。そなたのやうに、人をおもはぬ心には、そのきたもあるまじき也。但忘れ草うふるときかば、さては日ごろすこしはおもひたまへるかとしるべきなりとよめり。女のうたはなりひらのこゝろにわすれ草うへ給ひそとよみたるを、なりひらはまた女の心のうへばかりにのみなし給へり。

一此だんは、女のかんにんせいなく、心よからぬ事をかきあらはせり。されば源氏あまよの物語にも、この心をかけり。ゑんに物はちして、うらみいふべき事をも、見しらぬさまにしのびて、うへはつれなくみさをつくりて、心ひとつにおもひあまる時は、いはんかたなくすごきことは、あわれなる歌をよみをき、しのばるべきかたみをとゞめて、ふかき山里、世はなれたるうみづらなどに、はひかくれぬかしとあり。是は此伊勢物語の女のことをあまよの物語にかきあらはしたると見へたりと、古人何れもおほせられしなり。つぎのことばに、わらはに侍りし時、女房などのものごたりよみしを聞て、いとあはれにかなしく、心ふかき事かなとなみだをさへをとし侍しなどあるは、この伊勢物語の事成べし。又そのすへに、あまにもなさでたづね取たらんにも、やがてあひそいて、その思ひいでうらめしきふしあらざらん

や、あしくもよくもあひそいて、とあらん折も、かゝらんきざみをも、見すぐしたらん中こそ、ちぎりふかく、あわれならめ、我も人もうしろめたく心をかれじやはとあり。此だんの言ばよくあひにたり。

また／＼ありしよりけにいひかわして、男、

忘るらんと思ふ心のうたがひにありしよりけに物ぞかなしき

一又々ありしよりけにとは、ありしよりまさりてといふ義也。かつといふ勝の字をかく也。夕さればほたるよりけにもゆれどもひかりみねばや人のつれなき、これもほたるよりまさりてなり。いづれもけもじすむべし。おもふ心のうたがひにとは、今かくかたらへども、又われをや忘れんとおもふうたがひあれば、いにしへよりもなを心そひかなしき也。

返し、

中空にたちいる雲の跡もなく身のはかなくも成にける哉

とはいひけれど、おのが世々になりにければ、うとく成にけり。

一此歌は、女のわが身をくわんじてよめるなり。わがころさだまらぬゆへ、男にもかくうたがわるれば、我はたゞなかぞらのくものごとく、たよるべきかたもなく、はかなき身に成たるよと成。ろんごにいはく、ふぎにしてとみ、またたつときは、我においてうかべる雲のごとしと有。

一とはいひけれど、おのが世々に成にければ、うとく成にけるとは、あはれなる歌をよみ、おとこをしたふやうなれども、つみにりべつして、いもせのなかつたへ（たると）いふこと也。このだん女の心あだなれば、我身をたまたぬぞとおしへをかきたる也。

むかしはかなくてたへにけるなか、なをやわすれざりけん、女のもとより、

うきながら人をばえしも忘れねばかつうらみつゝ猶ぞ戀しき

といへりければ、

一むかしはかなくてとは、一たびあいて、やがてわかれたる中也。されどもわすれかねての歌也。うきとは思ひながらわすられねば、かくうらむれども、なをこひしきと也。かつうらみつゝは、かつゝにあらず、かくといふ心なり。古今に、かつこへて別もゆくかあふさかは人たのめなる名にこそありけれ、これもかくこへてなり。

さればよといひて、おとこ、

あひみては心ひとつをかわしまの水のながれてたへじとぞ思ふ

とはいひけれど、その夜いにけり。

一さればよといひて、おとことは、さればこそわす

(一一)

れぬよといひて、やがていきたる也。あひみての歌は、女にあいてのうた也。かくあひみてより後

は、心ひとつをたがひにかわして、水のながれのやうに、たゆる事はあるまじきなり。かわしまとは、河の中にあるしま也。なぐるゝ水の其嶋にあたりて、ひだりみぎへわかるれども、行末は又ひとつになぐるゝごとく、此比すこしへだゝりいたる事を、川しまのみづにおもいよせてよめり。この心おもしろし。但此嶋の事、次のせつにいふ義もあれども、またおもしろしともちぬ給へる人も有。かやうの事は、おのゝこのむ所によるべきと也。はや數百年むかしのことなれば、なりひらのまことの心を、たれかはよくしり侍らんと、後成恩寺どのもおほせられしとなり。

一其夜いにけりとは、かくたえぬちぎりおぼよみたれども、その夜ははやくかへりしなり。一せつに、その夜いにけりは、歌をよみてのちといふぎ

も有、いづれかまことならん、よくゝ吟味すべし。

いにしへ行ききの事どもなどいひて、

秋の夜の千代を一夜になずらへて八千よしねばやあ
く時のあらん

いにしへ行ききの事どもなどいひてとは、きぬ
ぐの名残おしむものがたりなり。源氏物語にも
いで給へり。かへり給へりなどいひてのちに、さ
まぐのものがたりをかけるよせいおほし。その
たぐひ也。歌の心はあきらかなり。ながき秋の夜
を千夜をひとよになして、それを八千夜ねばや、
さもあらば、もしあく時かあらんとよめるなり。
秋のよのちよを一夜になせるともことば残て鳥やな
きなん

いにしへよりもイもあはれにてなんかよひける。

一此歌の心もあきらかなり。男のよめるごとく、八
せん夜いねたりとも、猶名残の言ばは残るべきか

となり。ちよをひと夜といふばかりにて、八千代もこもべるし。三十一字のかぎりあるによりて、おとこのよみたるうたのかしらばかりいひたるなり。

(二三)

昔いなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいであそびけるを、おとなに成にければ、おとこも女もはぢかはしてありけれど、男はこの女をこそゑめとおもふ。女は此おとこをと思ひつゝ、おやのあはすれどもきかでなんありける。扱此となりのをとこの本よりかくなん、

つゝ井つのみづゝにかけしまろがたけ過にけらしな
いも見ざるまに

一ゐ中わたらひとは、ありつねちぎやうなどへ時々
かよふと也。これよりすゑのことば注にをよば
ず。歌の五もじせうようゐん殿御かうしやくの時
も、義つけられず、もんじよみばかりなりとかや。

せうみやう(ゐん)殿の御説には、つゝ井とは、
石などもつまぬ井也。古注さまゝあれども、
たゞ井づゝなり。つゝのいづゝといふはかさねこ
とば也。またや(す)めじともいへり。^引つゝいつ
のいづゝのたるひとけぬまにはやくもくるゝ冬の
空哉、又有歌に、つゝいつの井づゝのうへに水こ
へてむすぶもあさし五月雨の比。

一まろがたけとは、我たけといふ義也。おさなきも
のゝ名のりに、せんまつ丸、ひさ松丸などいふ、
このもんじなり。いもとは、女をさしていへり。
はじめより思ひかわして有ければ、わが女のやう
にいひなして、そなたのみざるまに、我もおとな
しくなりて、はやたけもゐげたにすぎたるぞとよ
めり。そこにわはやあはんといふ心ふくめり。

女返し、

くらべこしふり分がみもかた過ぬ君ならずして誰か
あぐべき

などいひくゝて、つゝにほいのごとくあひにけり。

一 おとなになれば、かんざしする也。かみあげなどいふ事も、君ならでは、たれにてをふれさせんと女のいふ也。ほいのごとくは、ほんいのごとくふうふと成たる也。

扱年比ふるほどに、女おやなく、たよりなくなるまゝに、もろともにいふかひなくてあらんやはとて、河内の國たかやすのこほりにいきかよふ所いで來にけり。

一女おやなくたよりなくとは、この女の父か母か死去成べし。むかしは二年ぶくとて、父母にをくるゝ人、一しうきまでしやうじん也。もろともにいふかひなくてあらんやはとは、女のしやうじんなればとて、我もかひなくひとりねせんやはとて、かうちの國へかよひしなり。いろこのみ(の)ざい中將、此義もつとも也。たゞしいせつにいはく、をんなおやなくたよりなくなれば、もろともにまづしくしてあらんよりは、女をもよきかたへ

ありつけ、我もさるべきかたのゑんをもとむるやうに、大和物語などをひきてかき給へり。さやうに見れば、ふうふのちぎりかひなく、ざい中將の心たのもしげなき事也とて、とくめん此義もちゐたまはず。たゞしやうじんの義にてしかるべきなり。

さりけれど、このもとの女、あしと思へるけしきもなくて、いだしやりければ、をどここと心ありて、かるにやあらんとおもひてうたがひて、せんざいの中にかくれいて、河内へいぬるがほにて見れば、このをんないとうけさうじてうちながめて、

風ふけばをきつ白浪たつ田山夜半にや君がひとりこゆらん

とよみけるを聞て、かぎりなくなしと思ひて、河内ゑもいかず成にけり。

一 此だんちうにおよばず。あきらか也。をんなあまりしつとなきほどに、もしこと人に心ありて、我

をばねたまざるかとかへつてをんなをうたがひし也。^引うらみぬもうたがはしくぞおもほゆるたのむ心のなきかとおもへば、此歌本歌にはあらず、るい引にやあらん、御かうしやくの時引給へり。又は、木々の巻にも、あまりむげにうちゆるべ見はなちたるも、心やすくらうたきやうなれど、をのづからかるき方にぞおぼへ待かし。つながぬ舟のうきたるためしもげにあやなし。さは侍らぬかといへば、中將うなづくと有。女あまりねたみなきも、かへつてうたがひをおふこと也。さりとて又けしきおそろしくことばをあらすべからず、又おなじ巻のところに、ゑんずべきことおも見しれるさまにほのめかし、うらむべからんふしをものにからずかすめなさば、夫につけて、あはれもまさりぬべし。おほくは我が心も見る人からおさまりもすべしと有。伊勢物語にも取分て、此段源氏にもあま夜の物がたり、みな女のをしへなり。よ

く心をつけて見給べき也。扱うたの心は、まくら歌也。たつた山といはん爲に、(奥津白波といひ、奥津白波たつた山といはんために)風吹ばとをく也。顯注密勘にもしるせり。萬葉にも、わたつ^(のそこ)つみのおきつ白浪たつた山いつかこへつゝいもがあたり見んと有。序歌はかやうにもあるや。敷島のやまどにはあらぬから衣比もへずしてあふよしもがな、此心也と定家卿もの給ひし也。又いはく、しらなみとはぬす人の事也。其ゆへは、さうじにぬす人の名を綠林^{りよくりんはくろう}白浪^{しろなみ}と有。しかれどもさやうにみれば、歌のさまゆうげんならず、たゞ波風はげしき夜、立田山をこへ給ふらんと、男をかなしびてよめる心あはれなり。

まれ／＼かのたかやすにきてみれば、はじめこそ心にくも^{くイ}つくりけれ、今はうちとけててづからいひかひとりて、けごのうつはものにもりけるをみて、心うがりていかず成にけり。

一此ことばあらはなり。はじめは心にくきさまにつくろひしが、なりひらかれぐに成給へるによつて、ぎやうぎをみだして、さやうの事もあるべし。けごとは、家の子とかけり。うちの物どもの事成べし。此段はいかいていなり。

さりければ、彼女やまのかたを見やりて、君があたりみつゝをゝらんいこま山雲なかくしそ雨はふるとも

といひて見いだすに、からうじてやまと人こんといへり。よろこびてまつに、たび／＼過ぬれば、

君こんといひし夜ごとに過ぬればたのまぬものゝ戀つゝぞぬる

といひけれど、男すまずなりにけり。

一此ことば歌かくるゝ所なし。君がかたをせめてはみてもなぐさまんに、たとひ雨はふるとも、雲なたちかくしそとよめり。いこま山たかき山也。のういの歌に、わた野引べの大江（ヤ）のきしにやどりし

て雲井に見ゆるいこま山かなと有。からうじてとは、やう／＼にしての心也。まちくるしむ義也。

やまと人はなりひらなり。けふはとひこんなどゝ文などをこせて、たび／＼たがふなるべし。此歌女の歌也。君こんとたび／＼いひてむなしく過ぬれば、かならずとはおもはねども、もしや／＼とこひまつてい也。新古今には、こひつゝぞふると有。男すまず成にけりとは、かくあわれなる歌などよみけれども、をとこそわずなるといふ義也。

(二四)

昔男かたぬ中にすみける。おとこ官づかへしにとて、わかれをしみて行にけるまゝ、三にとせこざりければ、まちわびたりけるに、いと念比にいひける人に、こよひあはんどちぎりたりけるに、此男きたりけり。

一かたぬなかにすみけりとは、なり平也。官づかへしにとて、京へのぼる也。みとせこざりければとは、令第三にいはく、其夫没落外蕃、有（そのちからをわづらふにまづかへて）子五年、

こなきはさんねんにして かをあらたむことをゆるす
無_レ子三年而許改_レ嫁と有。さやうの事にや。

一 此男きたりけるとはなり平也。

此戸あけたまへとたゝきけれど、あけで歌をなんよみていだしたりける、

あら玉の年の三とせをまちわびて只こよひこそ新枕すれ

といひいだしたりければ、

一 此歌かくるゝ所なし。しんじちのにいまくらのやうによめる也。なりひらをうらむる義也。定家の歌にも、忘なよ三とせの後の新枕さだむばかりの月日成とも。

あづさ弓まゆみ月弓年をへて我がせしがごとうるはしみせよ

といひていなんとしければ、

一 有せつに、弓を三ツかさねていふは、三ツはる也。三春は三春すなはち三年なりといへり。當流そきせず、かぐら歌にも、弓といへばしなゝきも

のをあづさ弓まゆみつき弓しなこそ有けれ、此歌

にいゑるがごとく、三ツかさねたるは、ことばのしな也。又月日のはやき事をやにたとへて、とし

のやといふ事あれば、としの矢を弓といひかへたるもおなじ事也。しかれば三ツの弓は三とせ也。

そのあいだ我が心はそなたにひかれてありしほどに、そなたも我とくちがためし、ちかひをうるはしくし給へと也。うるはしみといふ心は、まことにたゞしくし給へといふ義也。もじにもともよしとかきて、うるはしみとよめり。

女、

あづさ弓ひけどひかねど昔より心は君によりにし物を

といひけれど、男かへりにけり。

一 うたの心は、そなたの心我をひくやらん、ひかざるやらんもしらず、我が心はそなたによりにし物をと也。これていちよの歌、古今戀のふにも、は

るみちつらきが歌に、あづき弓ひけばもとすへわ
ががたによるこそまさされ戀のこゝろはと有。

女いとかなくして、しりにたちてをひ行ど、えをひつ
かで、清水の有所にふしにけり。そこ成けるいはに、

およびのちしてかきつけゝる、

あひおもわでかれぬる人をとゞめかね我身は今ぞき

へはてぬめり

とかきて、そこにいたづらに成にけり。

一 此段かくるゝ所なし。みとせまちくらしたる心う
さに、こよひ新枕したるぞとおとこにくねりてい
ひけるを、をとこまことゝ思ひて、歌をよみすて
行けるを、女の返歌に、我心は君ががたにのみよ
りぬし物を、なにとてさることあるべきぞとあは
れにちんじてよみける返歌をもえきかで、むまを
はやめかへる程に、したひあくがるれども、えお
ひつかぬさま、まことになしかるべし。あまり
のせんかたなさに、ゆびをくひきりあはれなる歌

をいはにかきつけ、ふかきし水の有におち入て、
はかなく成たる也。をよびはこよび也。歌のこゝ
ろは、あひをもわでの五もじまづあはれなり。た
がひにおもふ中ならば、われあやまりありといふ
とも、何とてさやうにはなどゝもあるべきを、聞
もあへずさらばとてかへりしは、あひおもわぬゆ
へと也。かゝる人に年比心をつくして、たゞいま
きゑはつるよとよめる歌、まことにためしなきけ
んぢよ成べし。とくめん此所をかうしやくの時
は、いつも泪ぐみ給ひしと也。しかるをきんだい
の歌人、こゝをばつくりものがたりとばかりかき
て、くはしき義をばあらはし給はず。夫もさだめ
て心有事成べし。

(二五)

むかし男有けり。あはじともいはざりける女のさすが
なりけるがもとにいひやりける、

秋の野にさゝ分しあさの袖よりもあはでぬるよぞひ

ちまさりける。

一 あはじともいはざりける女とは、あふまじきとは
おもわねども、なりひらあだ人と聞て、さすがあ
はんともいひさだめぬ也。これまことの色このみ
也。源氏うつせみの巻にも、女もなみくならず、
かたはらいたしとおもふに、御せうそこもた
へにけり。おぼしこりにけりとおもふに、やがて
つれなくてやみ給なましかば、うからまし。しあ
ていとおしき御ふるまひのたへざらんもうたてあ
るべし。よきほどにてかくてとちめんと思ふ物か
ら、たゞならずながめがち成とあり。此こゝろに
同じ。うたの心は、秋の野といひ、さゝ分しあし
たのそで、いづれも露ふかき物也。されども君に
あわぬ夜の袖はなをぬれまさるとの義也。

色このみなる女返し、

一 色このみ、たれともなし。古今には小町とあり。
みるめなき我身をうらとしらねばやかれなであま

のあした行くる。

一 此歌色々の儀有。一せつにはわが身をうらとしら
ねばやとは、おとこをさしていへる義也。わがそ
なたへ見えぬは、そなたにうらみあるゆへ也。そ
れをしらで、あしのたゆきまでかよひ給ふと也。
又いはく、みるめなき我身とは、女の身の事也。
人に見らるべき事もなき身を、うらみて有物を、
それをぼしり給わで、心をつくしかよい給ふよと
いふ事を、かいさうなきうらともしらで、あまの
行かよふにたとへてよめり。かれなでとは、たえ
まもなくとなり。

(二六)

昔男、五條わたりなりける女をえゝずなりにけること
ゝわびたりける人の返事に、

おもほへず袖にみなどのさわぐかなもろこし舟のよ
りしばかりに。

一 五條わたりなる女は、二條のきさき也。わびたり

ける人とはそめどのゝきさき也。なりひらの思ふ人心にもまかせぬよとあわれみ給いて、そめ殿より御ふみなどの有を、わびたりけるとは、(涙のうみになりて唐舟のよりたる心ちすると) いへり。是は我思ひのふかき事を、うみにたとへてよ

みたる心也。又いはく、なりひら二條のきさきゑ密通の事をば、そめどのはかたく御いましめあるべき事を、かく御あわれみのかたじけなさに、よるこびの洩うみに成たるとの義ともいへり。又せうみやうみんののは、此わびたる人は、そめどのにあらず、しるべする(人)也とおほせられし也。

一よりしばかりのしは、くわこにあらず、をきじ成と也。又せうみやうみんのは、くわこのしにてよしと也。又いはく、げんぎいのくわこといふ事有。そのたぐひ成べし。ながめつゝけふはむかしになりぬとものきばの梅^(は)よ我をわするな、りやうぜんのしやかのみまへにちぎりてしんによくち

せずあひみつる哉、此つるのじ、いづれもくわこなれども、げんぎいのくわこ也。よくゝぎんみすべし。此おもほえずの歌の心を、定家卿、なくちどり袖のみなどにとひこかしもろこし舟のよるのねざめを。

(二七)

むかし男、女のもとに一夜いきて又もいかず成にければ、女の手あらふ所に、ぬきすをうちやりて、たらいのかげにみえけるを、^{みづかちイ}

我ばかり物をもふ人はまたもあらじと思へば水の下にも有けり

とよむを、

一むかしぬきすとて、竹をあみ、たらひにおほいて水をちらさぬ也。そのぬきすをうちやりたれば、したたる水に我かほのかげ見ゆるをよみたる也。歌の心は物をもふものは身ひとりかと思へば、水のそこにもありけるよとよめる也。わがかげをよ

みたるによりて、みづからとはいへり。我事を我
となどいふ心也。

かのこざりけるをとこたちきゝて、

みな口に我やみゆらんかわづさへ水の下にてもろご
へになく。

一なりひらの返し也。水口のかわづがひとつなきそ
むれば、ことぐくなき、鳴やめばみななきやむ
也。其ごとく我おもひふかければ、そなたともに
なげき給ふかとなり。かはづさへと有さへの字の
こゝろおもしろし。いはんや人間はといふ心也。

(二八)

昔色このみ成ける女、いでゝいにければ、

などてかくあふごかたみに成にけん水もらさじとむ
すびしものを。

一あふごとは、あふ時といふ心、又あふ事とも心
(う)べし。なにとてかくあふ事のかたくなりたる
やらん、ちぎりし事は、かごに入たるみづのごと

くになりたるとよめるなり。かたみとはかご也。
あふ事のかたきとよみかけたる也。

(二九)

昔春宮の女御の御方の花のがにめしあづけられたりけ
るに、

花にあかぬなげきはいつもせしかどもけふのこよひ
ににる時はなし。

一春宮の女御とは、二條のきさき也。とうぐうと
は、やうぜい院なり。いまだ御くらゐにつき給は
ぬゆへ、御はゝきさきとは申さずして、とうぐう
の女御とはかきたる也。(古今第一、文屋のやす
ひでが春の日の光にあたるとよめる歌のことば
に、二條のきさきの春宮のみやすん所と聞えける
時とかける、御やす所は女御の事也)。がの事け
んじものがたりにもくわし。ゆへ有人は、四十よ
りはじめて十にみつるとし、賀のいはあとして、い
かめしき御あそび、じゆみやうぎやうなど、かう

どくにて、御いのりの事有。春の賀をば花のがといひ、秋の賀をば紅葉のがといひ、冬の賀をば雪のがといへり。子がたなる人、親かたをいはまたまふ事也。此賀はもしそめどの、後の御賀を、とうぐうの御母、たか子のあそばされたるかと也。

さのみたづぬるにおよぶべからず。歌の心は、花をけうじてよめるやうなり。下には彼女御の御事成べし。此君にあき奉らぬなげき、けふほどかなしき事はなし、こよひほどかなしき事はなしと、いづれもく／＼なげかわしきに、又けふのこよひにる時はなしとよめる也。長(ん)ごかに、はじめてこれあらたにおむたくをうくる時と有。此心にや。おもしろき歌也。

(三〇)

むかし男、はつか成ける女の本に、
あふ事は玉のをばかりおもほへてつらき心のながく
みゆらん。

一玉のをばかりはいさゝかばかり也。あふことは露ばかりにて、つらきこゝろはながしといへり。あふことはたまのおばかり名のたつはよし野、河のたきつせのごと。

(三一)

むかし宮の内にてあるごたちのつばねの前をわたりけるに、なにのあたにか思けん、よしや草ばよ、ならんさが見んといふ。

一宮のうち、きんちう也。つばねの前をわたる人、なり平也。なにのあたとはしらねども、なり平をそねみて、よしやくさばよ、ならんさが見んといへり。(心は)いまこそさかりなりとも、あき風のふきてしほるゝ時あらんものをといふ心也。忘るゝつらさはいかに命あらばよしや草ばよならむさが見ん。さがはつまびらかならずとかく也。又あくの字もさがとよむ也。とかくはてはあしくならんと、なりひらをじゆそしていふ心也。

おとこ、

つみななき人をうけらば忘草をのがうへにぞをふといふなる

といふを、ねたむ女も有けり。

一歌の心はとがもなき我をのろい給はじ、かへりてそなたの身におふべしと也。一せつにいはく、忘草は人のはかよりをふる草といへり。あしかれと人をばいはじなにはがたわが身のとがのかへる白なみ。又法花普門品に、呪咀諸毒藥、所欲吾身者、念彼觀音力、還着於本人とあり。といふをねたむ女もありけりとは、かくいひかはすをきゝてしさいこそあるらめとて、ねたむ也。此女のならひ也。

(三三)

むかし物いひける女に年比ありて、

いにしへのしづのをだまきくり返しむかしをいまになすよしも哉

といへりけれど、なにともおもはずや有けん。

一歌の心はあきらか也。いにしへといひ、昔とい

ふ、同事也。いまなどかくよまんはよろしからず。是はいにしへのしづのおだまきといひて、昔をいまにくり返したきと句をへだてたれば心かわる也。いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりはありし物也。愚(見)せうには、女のうむをゝまきをきたるをへそといふ、その事也と云々。此歌はむかしものいひたる女によみてやれば、むかしをいまになさばやといえり。女なにともおもわずやありけん、また思ひてやありけんの心也。これ作者のひはんのことばなるべし。

(三三)

昔男つの国むはらのこほりにかよひけり。女このたびいきては又はこじとおもへるけしきなれば、男、

あしべよりみちくるしほのいやましに君に心をおもひます哉

一歌の心は我そなたをおもふはしほのますごとくと

よめる也。あしべのしほはみちくれども、うへには見えず、我心もうへにはみへずとも、しほのみちくるやうにおもひますと、女をなぐさめてよめる也。万葉、あしべよりみちくるしほのいやましに思ふか君が忘れかねつる、此下句をかへたり。

返し、

こもり江に思ふ心をいかでかは舟さすさほのさしてしるべき

いなか人の事にてはよしやあしや。

一こもり江とは、あしなどのしげりたるかげにこもりたる江なり。そのかげにみちくるしほは、何とてこなたにはしり待るべき。御心をうへにあらはして見ばやといふ心也。さしてといはん爲に、ふねさすさほとよめり。あしべのゑんにもおもしろかるべし。次のことばは、いなか人のことにてはよしやあしやとは、是ほどによめるはよきかあしきかと、なりひら伊勢にとい給ふことばなるべし。

(三四)

むかしおとこ、つれなかりける人のもとに、いへば江にいはねばむねにさわがれて心ひとつになげく比哉。おもなくていへるなるべし。

一詞書を心にきて此歌をば見るべし。いはんとすればゑもいはれず、又いはねばむねにみちてさばぐやう也。さるほどに心ひとつになげくと也。心ひとつによく心をつくべし。おもなくていへるなるべしとは、つれなき人にもこりず、おもてつれなくて申といふ義也。

(三五)

むかし心にもあらでたへたる人のもとに、玉のをゝあはをによりてむすべればたへての後もあらんとぞ思ふ。

一たまのをといふ事、あまた有。命をもいふ。又すこしといふ心もあり。爰にては、たゞよきいといはんため也。たまはほむることば、たまやな

ぎ、たまつばきなどいふたぐひ也。あしきいとは
きるればはやつぎがたし。我とそなたの中は、よ
きをゝあはせをにしてむすびたれば、たとひたへ
たりとも、又あわせよからんとよめる也。又こと
ばがきに心にもあらでたへたと(は)おもふま
ゝにもなくたへたと也。

(三六)

むかしわすれぬるなめりとゝひ事しける女のもとに、
たにせばみみねまではゆる玉かづらたへんと人に我
をもはなくに。

一うたの心は谷ひろければ、こなたかなたへはへる
物也。我はせばきたにのかづらのごとく、たゞ一か
たにそなたばかりあはへるほどに、中／＼たゆる
事あるまじきと也。万葉、谷せばみみねにはへたる
玉かづらたえん心⁽²⁾われはをもはず、此歌をすこし
かへたり。又まへがきに、わすれぬるなめりとゝ
ひ事しけるとは、そなたにははやわすれたまへる

やと、男にとひうらむるほどに、此歌よみたる也。

(三七)

むかしおとこ、色このみなりける女にあへりけり。う
しろめたくや思ひけん、

我ならでひ⁽¹⁾たひもとくなあさがほの夕かげまたぬ花
には有とも

一うたの心はべちぎなし。あさがほの夕べのかげを
もまたぬやうなるこゝろ也とも、かまへて／＼我
ならで、こと人にしたひもとくなといふ義也。

あさがほの昨日の花はのこるとも人のこゝろをい^引
かゝたのまんと有。

返し、

ふたりしてゆすびしひもをひとりしてあい見るまで
はとかじとぞ思ふ。

一女なりひらのうたがひをちんほうしてよめる也。
そなたとふかくちぎりにてむすびたれば、我が心ひ
とつにては、中／＼とくまじきと也。

(三八)

昔きのありつねがりにきたるに、ありきておそく來けるによみてやりける、

君により思ひならひぬ世中の人は是をや戀といふらん

一ありつねがりとは、ありつねがもとへと言儀也。

いもがもとへゆくおも、いもがりゆけばなどよめり。其心也。なりひらありつねがもとへ行たるに、ありつねよそありきして、をそくかへるほどに、よみてやりたる也。歌の心は、君ゆへに人をまちてかなしきといふ事をはじめておもひならひたり。世中の人のこひなどゝいふ事は、かやうの事にてや有らんと、たわぶれてよみたる也。

返し、

ならはねば世の人ごとに何をかも戀とはいふとひし我しも。

一ありつねの返歌也。我も戀といふ事をならはざれ

ば、世の人のこひといふは何事ぞとひしものを、そなたも我ゆへにしり給ふとあれば、扱はさようのことかと我もしると云ぎ也。われしものしもし、やすめ字也。

(三九)

むかし西院のみかどと申みかどをはしましけり。其御門のみこ、たかいこと申す、いまそかりけり。

一さいゐんとは、じゆんわ天王也。大はら野にみさゝぎ有により、さいゐんのみかど、申也。そのみこ、そうしなishんわうは、せうは十五年五月十五日にほうじたまへる也。そうしなishんわうをやはらげて、たかい子とかきたる也。

其みこうせ給いて、おほんはふりの夜、その宮のとなり成けるをどこ、御はふりみんとて、女ぐるまにあひのりていでたりけり。

一御はふりとは、さうれい也。となりなる男は、なり平也。女ぐるまにあひのりてとは、女とひとつ

にのりたる也。

いと久しうゐていで奉らず、うちなきてやみぬべかりける間に、あめのしたの色このみ、みなものいたると云人、是も物見るに、此くるまを女ぐるまと見て、よりきて、とかくなまめくあいだに、かのいたる、ほたるを取て、女ぐるまに入たりけるを、くるま成ける人、此ほたるのともす火にやみゆらん、もしけちなんずるとて、のれる男のよめる、

出ていなばかぎりなるべみともしけち年へぬるかとなくこへをきけ

一此だんむつかしき也。久しうゐていで奉らずとは、野にいだし奉ることをかなしみて、時うつりし也。うちなきてやみぬべかりけるとは、なり平もあわれなることを見んよりも、はやかへらんかとなくさまなり。かのいたる、此くるまをなりひらとはしらず、女ばかりかと思ひ、よくみんな爲に、ほたるをふくろに入て、かねてよりもちたる

にや、此くるまに入たるを、なりひらくるまのうちを見えじと、ほたるをうちほらひて、歌をよみたる也。歌の心は、只今野にいで給わば、此世のかぎり成、ことにとしへ給へるにもあらずと人々のなくこゑをきけと、いたるをはぢしめてよめる也。中の五もじにともしけちとよめるは、法花のものにいはく、むろの妙法をとひて、むりやうのしゆじやうをわたし給ふ。いままきにねはんに入給ふべし。あぶらつきてともし火のめつするがごとしと有。其心也。又いはく、佛このよめつどしたまふ、たきゞつきて火のめつするがごとしと有。猶せつゝおほかるべし。

かのいたる、返し、

いとあわれなくぞ聞ゆるともしけちきゆる物とも我はしらずな

一此心はなりひらの歌を、もつともとうけたるやうにて、たゞし我はあわれともきかず。ともし火の

きゆるも、まことにきゆるにあらず。しやうある物は、かならずしすることはりなれば、はじめて

なげくべきにあらず、生るゝ時、ほうかひの五たひをかりて生れ、しする時は五たひをかへす。た

ゞ是即非眞滅也。又法花じゆりやう品にも、はう^{方便}べんげん^{現涅槃}ねはん^{涅槃}ととき給へば、もゆるともきゆる

とも、我はしらず、ねごんふしやうはんこんふめつなればと也。

あめのしたの色このみのうたにてはなをぞ有ける。いたるはしたがふがおほちなり。みここのほいなし。

一此なをの字、ぢきの字をかきたるも有。定家卿、てんぶくの本には、猶このじをかき給ふ。此義もつともなり。かゝるなげきの中に、かやうのうたはなを色このみなるよとなり。されども御子のために、ほいなきこと也。この中に、いたるはしたがふがおほちと有。此事古來ふしん也。かうしやくの時、したがふがためにはおほち也など、い

ひしを、聞がきにつけたるを、後にあやまりて中へかきいれたるかと也。

(四〇)

むかしわかき男、けしうはあらぬ女をおもひけり。さかしらする親ありて、思ひもぞつくとして、此女をほかえおいやらんとす。さこそいへいまだおいやらす。

一けしうはあらぬとは、あやしうもあらぬ也。(其心はあしからぬ也。一説にげしうはあらぬ也)。

けの字をにごりてよむべしなど、いふ義有。此義いかゞ。源氏物語などにも、けの字すみてよめり。さかしらするをやとは、何かとかしこがほにむつかしくいけんなどする事也。爰にきてはなり平かよひ給ふほどに、ほかへやらんと也。され共あらましのみにて、いまだやらぬ也。

人の子なれば、まだ心いきほいなりければ、とゞむるいきをひなし。女もいやしければ、すまう力なし。一人のこなれば、まだいきをひなかりければ、とゞ

むるいきおひなしとは、上らうはをもふことをもたけくいはず、ふくりうのいきほいををししづむる物なればこれをからかいて、とゞめもせぬ也。源氏物語にも、それより下らうのかうひたちは、ましてやすからずとかけるも此心也。

一女もいやしければ、すまうちからなしとは、まだおきなければ、をやにもからかわず、えすまわぬ也。てうていには、しやくにしかず、きやうたうにはよはひにしかずといふ心也。其心にてまだわかきをいやしければとかけり。

さるあいだに思ひい^はやまさりにまさる。にわかにおやこの女をおいうつ。男ちのなみだをながせどもとゞむるよしなし。

一なり平の思ひせつなるていみゆれば、おやにはかにほかへをいやる也。

一をいうつのことば、もんぜんにいはいく、おやにをいうたれたる子、君にをはれたるしんとあればな

り。たゞせつかんしてやる也。

一ちのなみだをながすとは、思ひのせつなる時は、なみだもちになるといふ事有。やうきひばぐわいがはらにてせつがいの時、げんそうちのなみだをながし給ふといふことを、うななふくしてなる血涙相和流とかけり。

我朝のそうじやうへんせう、仁明、ほうぎよの時、さいしにわかれ、世をすてゝ、みのかさばかりを身につけ、爰かしこと山伏せしに、初瀬寺にいたりし時、もとの女二人の子をあいぐして、此初瀬にまうできて、此むねさだの行末をしらせてたび給へと、なきこがれていのる有さまを見るに、まことにはらわたをたち、心もきえぬべし。しかれども一たびきりたるおんなひのきづなに、又むすばゝれんは、くちをしとて、はをくいしばりいたれば、ちのなみだみのにかゝりたるよし、大和物がたりにもかきたる也。

いてめでゝいぬ。おとこなくゝよめる、

出ていなばたれかわかれのかたからん有しにまさる
けふはかなしも、

とよみてたへいりにけり。

一いていでゝいぬとは、おやのひきつれていぬる
也。それを見ておとこのよめる歌也。心はつねに
よりそい、かりそめにたちわかるゝ時こそ、名残
おしくかなしきなどいふ事はあれ、かやうによそ
へ行、なかたへはてんならば、なんぎなるわかれ
とおもはぬなり。我命あらばこそといふ心也。
かたからんとは、なんぎにもあらぬぞといふこと
ば也。扱下の句には、此世のかぎりぞと、よく

く思へば、ありし物思ひはことのかずにてもな
きぞと、べちくによみたるなり。まことにせん
かたなきたぐひ、よくく吟味すべし。かくよみ
てたえ入たるなり。

おやあわてにけり。なを思ひてこそいひしか。いとく
くしもあらじと思ふに、しんじちにたへ入にければ、

まどひてぐわんたてけり。けふのいりあひばかりにた
え入て、またの日のいぬの時ばかりになん、からうじ
ていきいでたりける。むかしのわかう人は、さるすけ
るものをもひをなんしける。いまのをきなまさにしな
んや。

一ことばみなあきらか也。たがひのためを思ひてこ
そ、あはつけきことはむやくとせつかんをもしつ
れ、かくたへ入給ふは、しんじちの心ざしにてあ
りけるよと、ほどけかみにぐわんをたてたる也。
むかしはわかき人さへかく心ざしふかき物おもひ
たりしに、今はとしたけたる人も思ひ入たるなさ
けはなきよと、さく者のことばなり。

(四一)

昔女ははらからふたり有けり。ひとりはいやしき男の
まづしき、ひとりはおてなる男もたりけり。いやしき
をとこもたる、しはすのつごもりに、うへのきぬをあ
らひて、手づからはりけり。心ざしはいたしけれど、

さるいやしきわざもならはざりければ、うへのきぬのかたをはりやりてけり。せんかたもなく、たゞなきになきけり。

一はらからの女は、ありつねがむすめふたりなり。あてなる男は、なりひら也。ひとりはたれともなし。いやしとかけるは、くわんゐなどのあさきこと也。しわすのつごもりに、きぬをあらふとあり。げにもまづしくあわれなるさまおもふべし。しならはざることなれども、女は三じうとて、いとけなきときはおやにしたがひ、(わかくさかりにしてはおつとにしたがひ)をいての後は子にしたがふ。これを三じうとて、みつにしたがふならひなれば、にあはざることなれども、手づからはらんとしてやぶりたる也。

これを彼あてなるをとこ聞て、いと心くるしかりければ、いとよなるろうさうのうへのきぬをみいでゝやるとて、

むらさきの色こきときはめもはるに野なるくさ木ぞわかれざりける。

むさし野くころなるべし。

一それをなりひら聞たまひて、よきろくゐのはうをとりにてゝやりたまふ也。ろうさうのうへのきぬとは、ろくゐのはうと心得べし。なをむつかしきことあれども、これをりやくす。歌のころは、むらさきといへるくさ、いつくしくおもしろき時は、いづれのくさ木もよしあし思ひわかれぬと也。めもはるにとは、はるかにながめやる也。さてつぎのことばに、むさしのく心とあるは、むらさきの一本ゆへにむさしのくさはみながらあわれとぞをもふ、此ほんか也と、さくしやのことば成べし。

(四二)

むかしおとこ色このみとしるく、女をあひいへりけり。されどにくはあらざりけり。しばくいきけれ

ど、なをいとうしろめたく、さりとしていかではたへあるまじかりけり。

一色このみなれば、たのもしくあらねども、にくからぬなり。次のことば、しば／＼いきけれど、あり。しば／＼はしげくゆけども、なを心もとなき也。うしろめたきとは、心もとなき也。さりとしていかではたへあるまじかりけりとは、うたがひながらゆかではゑあられぬなり。

なをはたへあらざりけるなか成ければ、ふつかみかばかりさはることありて、えいかでかくなん、いでゝこしあとだにいまだかわらじをたがかよひちと今は成らん。

物うたがはしさによめる成けり。

一なをはたへあらざりけるなかとほ、此人はうちそふべき人とも、またそふまじき人とも、我心ながら、一かたにあらざる心を、なをはたへあらざりけるなかとはいへる也。こゝのことばむつかしき

しだひ也と、いづれの歌人もかきをかれし也。扱うたのこゝろは、我そなたをいでゝこしそのあしあともいまだかわるまじきに、またたれをかやし給らんとうたがひてよめる也。

(四三)

むかしかやのみこと申すみこおはしましけり。

一くわんむ第七御子、かやうしんわうの御事也。ゑいぐわ物語にも、昔かやのみこと申こそ、ざいくはかしこかりけるとなり。

そのみこ、女をめして、いとかしこくめぐみつかう給ひけるを、人なまめきて有けるを、我のみとおもひけるを、又人聞つけてふみやる。時鳥のかたをかきて、

時鳥ながなく里のあまたあればなをうとまれぬ思ふ物から

といへり。

一そのみことは、かやのみこのてうあひの女也。人なまめくはなりひら也。我のみとおもひけると

は、なりひらの心、我のみなさけをかわすとおもふなり。又人聞付てとは、かやのみこ御てうあひの事、なりひらききつけたる也。爰にをのてにをはみつ有。あやしき事ばつゞきながら、いにしへよりかくよみつけたる也。時鳥のかたをかきてとは、ほとゝぎすをゑにかきてうたをかきたる也。歌の心は、女をほとゝぎすにして、汝がをとづるゝさとのあまたあれば、思ひながらまたうとまるゝと也。このうとまれぬは、をはんぬなり。なをの字心あまたあるじ也。なをゝといふ心もあり、まだといふ心もあり、又といふこゝろもあり。此なをのじは又也。扱またといふもふたつあり。いとゞうとまるゝに、又うとまるゝとは、そふこゝろ也。こゝはさやうにてはあらず、おもひながら又うとまるゝといふ心也。ながとはなんぢ也。なくはをとづるゝ也。

このけしき女イをとりて、

名のみたつしでのたをさはけさぞないほりあまたとうとまれぬれば。

ときはさ月になんありける。

一けしきをとりてとは、をとこのきげんを取て也。

名のみたつとは、我いづくへもおとづるゝ事なきを、をとづるゝいほりあまたといひかけらるゝほどに、只今こそなけとちんほうしたる也。名のみたつ五もじ、我あだなのたつとわびたる五もじ也。又しでのたをさといふも時鳥也。古今に、いくばくのたをつくればかほとゝぎすしでのたをさの朝なゝよぶ。此歌はほとゝぎすならで、しでの田をさとてべちにあるやうにきこへ侍りし。但ゑいぐわ物語に、さなへうふる折しもなくは時鳥しでのたをさとむべもいひけり。此歌にて、しでの田をさといふも、ほとゝぎすにさだまりたる也。

男返し、

いほりおほきしでの田をさは猶たのむ我すむ里にこ

へしたへずは。

一女をとこのきげんをとりてよめるうた也。なりひらあはれにおもひて、よし／＼そなたのをとづるゝさとおほくとも、我かたをだに（すて）給わずはと、又そんなのきげんをとりてよめる也。なりひらの心しゆせうなり。

（四四）

昔あがたへ行人に、むまのはなむけせんとて、よびて、うとき人にしあらざりければ、いへとうじにさかづきさゝせて、女のさうぞくかつげんとす。あるじの男うたよみてものこしにゆひつけさす。

出て行君がためにとぬぎつれば我さへもなく成ぬべき哉。

一あがたへ行人、きのありつね也。あがたはあ中なり。なり平はありつねがむこなれば、うとき人にてはなき也。家とうじとは、女あるじをいふ。すなはちありつねのむすめ也。女のさうぞくかつげ

んとすとは、もからぎぬなどを、はなむけにまいらする也。あるじのおとこ歌よみてとは、なりひら歌よみて、ものこしにゆひつけさす也。歌の心は、たびに出給ふ人に、このきぬをまいらすれば、我もわざはひなくなる也。みんとくやうはうとて、人のため、かげによき事をすれば、其むくひおもてにあらはるゝぎ也。ものじはわざはひ也。萬葉の長歌にも、たまきはるうちのかざりはたいらくやすくあらんを、こともなくもなくあらんを、世中のうけくつらくとあり。

このうたはあるがなかにおもしろければ、こゝろとめてよまず。はらにあぢはひて。

一此ことばに説々あり。あるがなかにおもしろければとは、なりひらの歌を、ありつねのほめたることば也。此時返し有べき事を、此うたにかんじ入て、返しなかりしといふ事を、はらにあぢわひてよめずとかけり。又よまずとすのじをすみてよむ

事あり。それすこしむつかしきかうしやくなれば
是をりやくす。

(四五)

むかし男有けり。人のむすめのかしづく、いかで此男^{にイ}
物いはんと思けり。うちいでんことかたくやありけ
ん、ものやみになりて、しぬべき時に、かくこそおも
ひしかといひけるを、おや聞つけて、なく／＼つげた
りければ、まどひきたりけれど、しにければ、つれ
／＼とこもりおりけり。時はみな月のつごもり、いと
あつきころおひに、よひはあそびをりて、夜ふけてや
ゝすゞしきかぜふきけり。ほたるたかくとびあがる。
この男みふせりて、

行ほたる雲のうへまでいぬべくは秋かぜふくとかり
につげこせ。

一此だんおほかた聞へたり。かしづくむすめとは、
いつきかしづく也。その人なりひらにおもひをか
けて、うちいでん事かたくやありけんとは、人に

かたらん事さがはづかしくなはずといふ義
也。さゝれ石の中に思ひはありながらうちいでん^引
ことのかたくもある哉、此心也。かくこそ思ひし
かとは、わづらひおもく成て、かぎりのときに、
めのとなどやうのものに、すこしいひいでたる
也。それをおやきゝつけて、なりひらにつげたり
ければ、すなはちきたり給へども、此女まぢもあ
へずしにたる也。なりひらは、そのかたちをも見
給わねども、我ゆへはかなくなりたる事をいとあ
われと思ひてこもりいたる也。時はみな月のつご
もり、こゝのていしるすにおよばずおもしろくか
きたる也。よふけてほたるたかふとぶとは、長こ
んかに、夕^{せきでんにはたとんとおもひせうなり}殿螢飛思悄然のていも有べし。
此歌別義なし。あつき比ほひなれば、よひにはす
ゞみいて、ふけ行まゝ、すゞしき風ふけば、はや
あきかぜのたつよなどおもひつゞけてよめるなる
べし。雲のうへまでゆくほたるならば、はや秋か

ぜの吹ぞとかりがねをもよをせと也。けんかみづ

くらうしてほたるよるをしる、やうりう風たかう
してかりあきをおくる、此よせひもあるべし。此
うた後撰にはあき也。こゝにては夏の歌とおもふ
べし。

暮がたき夏の日くらしながむればそのことゝなく物
ぞかなしき。

一このうたは、その夜よみたるとは見へず、前後は
しらず、いみにこもりて、ひるつかた（よみたる
歌成べし。ひくらしすみてよむなり）。せみの日
晩の事にはあらず。たゞ日を暮すといふ義也。此
歌そのことゝなくといへる、もつともおもしろ
し。此をんなあひ見たる事はなけれども、我を思
ふゆへになく成といふ人のいみにこもれば、何を
なごりにせんともあらず。そのことゝなくものゝ
かなしきと、たゞ世間のむじやうによみたるこゝ
ろことば、よせいかぎりなきうた也。

（四六）

むかしおとこ、いとうるはしき友ありけり。かた時さ
らずあひ思ひけるを、人のくにへいきけるを、いとあ
われと思ひて、別にけり。月日へておこせたるふみ
に、あさましくゑたいめんせで月日のへにけること忘
れやし給ひにけんと、いたくおもひわびてなん侍る。
世中の人の心はめかるればわすれぬべき物にこそあめ
れといへりければ、よみてやる、

めかるともおもほへなくにわすらるゝ時しなれば
おも影にたつ。

一うるはしき友とは、なりひらのしたしき友也。人
のくにへにんなどにくだる成べし。一任四ヶ年と
て、國をあづかる人、四年づゝにたちかわる事な
り。をん國は五年ともいへり。あさましうたいめ
んもせでとは、久敷あわで月日をふるよと文のこ
とば也。一日不^{いちにちみづかは}見如^{まんじつのごとし}（三）秋^{もみぢ}と毛詩にもあり。
つぎのことばにめかるればわすれぬべき物にこそ

あめれとは、あさ夕みかわすときは、念比なれども、たちはなるれば、こゝろざしもうすくちぎりもわするゝ物なればと云義也。めかるればとは、めをはなるればといふ心也。かくあわれにかきおこせたれば、なりひらより歌よみてやる也。そなたをわするゝ時なれば、おもかげはいつも身にたちそひて、めをはなれぬ也。しかればめかるゝとはおぼへぬぞと云事を、めかるとはおもほへなくにとよみ給へる也。さてわするゝ時しなければとは、そなたをわするゝ時なればといふ事也。しかればなかの五もじは、下の句につくことばと心得給ふべし。雲井引にもかよふ心のおくれねばわかると人にみゆばかり成。此心也。

(四七)

むかしおとこ、念比にいかでと思ふ女ありけり。されど此男をあた成と聞て、つれなさのみまさりつゝ、いへりおほぬさのひくてあまたに成ぬれば思へどゑこそ頼

まざりけれ。

一此ことばかくれなし。大ぬさとは、はらへのぬさも也。しよ人の手にふれ、河へながす物也。中將あだ人なれば、大ぬさにたとへてよめる也。大ぬさのやうにひくてあまたの人なれば、おもひながらたのまぬと女のよめるうたなり。

かへし、をどこ、

おほぬさと名にこそたてれながれてもつゐによるせは有といふ物を。

一大ぬさ、あれこれの手をかくるものにてあれども、はらへしてながせば、よるせあり。つゐによるせはそなたをこそといへる也。

(四八)

むかしおとこ有けり。むまのはなむけせんとて、人を待けるに、こざりければ、

いまぞしるくるしき物と人またんさとをばかれずとふべかりけり。

一此歌は、古今第十八にあり。ことば、きのとしさ
 だがあはのすけにまかりける時に、馬のはなむけ
 せんといひをくりけるときに、こゝかしこにまか
 りありきて、夜ふくるまで見へざりければ、遣し
 ける、なりひらのあそんの歌と有。うたの心はあ
 きらか也。人をまつことはくるしきもの也。人の
 まつといはゞ萬事をさしをきてゆくべき事にてあ
 るよと、我心にりやうけする也。此句おもしろし。

(四九)

昔男、いもうとのいとおかしげ成けるを見をりて、
 うらわかみねよげに見ゆる若くさを人のむすばん事
 を(し)ぞ思ふ
 とときこへけり。

一此ことば、いどをかしげなるとは、いもうとをほ
 めたることば也。うたの五もじに、うらわかみと
 は、わかくうつくしきといはんため也。うらはを
 き字也。うらさびしき、うらがなしきなど同事

也。春の若草のねよげにもへたるに、いもうとを
 たとへたり。草のねをねぬるかたにとりなした
 り。我はかくおもへど、人はいかやうにかちぎり
 もてなさんと、その事のみ思ふとかなしみてよめ
 るうたなり。此義おもしろし。

返し、

初草のなどめづらしきことの葉ぞうらなく物を思
 ひけるかな

一はつくさとは、めづらしといはんためのまくらこ
 とば也。ふたりのおや、子をばぐゝむ事も、ちゝ
 はほかにいさめて禮義をさきとし、はゝはうちに
 あわれみてじひをもとゝす。二しんのやういく、
 うらおもてことなり。此はらからの中將、をそこ
 なれども、おもてうらなくわれをかなしみ給ふ
 よ。あにの御心かたじけなしとよめるうた也。そ
 れをけさうのかたに聞なすこともちいず。但源氏
 のあげまきには、にほふ兵部卿、御いもうとの一

ぼんの宮に心をうつして、此なりひら、いもうとの姫君にことなどをおしへ、むつまじきさまかきたるゑなどを見せ参らせ給へば、一ぼんの宮、此ゑを御らんじて、うらなく物をといひけん、姫君もされてにく、おぼさると仰られしとかけり。しかれども此物語におゐて、さやうに見るはあしし、なりひらのれんみんな心へたるがよき也。

(五〇)

むかしおとこありけり。うらむる人をうらみて、とりの子をとをづゝとをはかさぬともおもはぬ人と思ふ物かは
といへりければ、

うらむる人をうらみてとは、なりひらをきよくなしとうらむる人を、またなりひらよりうらみての歌也。鳥のこをかさぬるといふ義につきて、さまぐゝの義あり。まづもんせんにいわく、しんのへいこうきうそ(う)だいをつくる。誠にたみのく

るしび、ばんみんのうれいたり。じゆんそくがこれをいさめんとて、臣はよくごの石を十二かさねて、そのうへにかいこを九ツかさぬることをするといふに、平公のいはく、それはあやうき事也。じゆんそくがいはいはく、是はあやうからず、君のきうそうだいをつくつて、はくせいをわづらはす。これすなはちあやうき事也と云。平公理をしつて、うてなをつくることやめたり。此こじよりして、とりのこをかさねんは、かなわぬ事にいへり。歌のこゝろは、その鳥の子をたとへば百かさぬる事はあるとも、おもわぬ人をおもふはなるまじき事とよみたる也。

朝露はきへ残ても有ぬべしたれか此世を頼はつべき
また、男、

吹風にこそこの櫻はちらずどもあなたのみがた人のこゝろは

一女のうたに、あさ露はとよめるは、でんくわう朝露^{てうろ}

とて、あだなるものなれども、その露はもし日か
げにきへ残てもあるべし。この世を久敷たのみす
ぐすものはあるまじきとよめり。おほかたの世を
いへるやうなれども、男の心のあだなる、一夜の
うちもたのまれずとよめる也。又男、吹かぜにこ
ぞのさくらとよめるは、まへのあさつゆのうたの
心也。かくれなし。はくしぶんしゆうにも、たと
ひきうねんの花木ずへにのこりて、こうしゆんを
まつといふとも、たのみがたきは是人のこゝろと
有。此心なるべし。こうの石をありにあふせては
こぶともあなたのみがた人のこゝろはとよめる歌
もあり。これみな人の心をうらみんとて、こと
くゝくなるまじき事をいへり。

又女返し、

ゆく水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふ成
けり

一此歌の事さまゝ義有。經文にも、又水にゑかく

がごとしと云事を、亦如畫水隨書隨合と有。又ふ
るき物がたりにいはく、むかしかさしまるの大
臣、つまにおくれてまたつまをよぶ。せんはらに
むすめひとりあり。又のちのはらにもむすめあま
たあり。せんはらのむすめ、かたち心世にすぐ
れ、さいち人にまされり。このゆへに、まゝ母是
をにくむ。かのむすめまゝ母のけしきを見しり
て、父にいふやう、我世のはかなき事をしりぬ。
されば世にたちいでひとゝならん事ふさわじ。か
らずがみをおろし、かたちをやつし、いかならん
あまでらにもこもりいて、母のぼたいをとぶらは
ばや、これしんじちの心ざしぞと父にたびゝい
へば、父是をあわれみて、すなはちうしろに入た
る山かげ有。ばんじやくさゆうにめぐりて、まへ
に川水はやし。ひとゝをからずして、人の行べき
所にあらねば、これにあんをむすびて、彼姫をお
く。其比たちばなの中納言成ける人此姫を心にし

めて、さまゞ云事あれど、更にそのふみを見る

事なし。せんかたなくて、いまはいのちもかぎりのさまをいひやりければ、女、そのおもひをやめんがために、さらば此前の河水にをもふといふもじをかきてみせ給へ、そのもじ水にあらはれたらば、誠の心ざしなるべしといふ。中納言思ひのあまりに、此河水にむかひて、思ふといふもじをかき事、月日をふるといへども、かすいにとゞまるもじはなし。その時男のうたに、引行水にかずかく事はあともなし人のつらさはつらさのみして、とよみてその川にをち入、むなしくなりたりと云事あり。それより物のはかなき事をば、ゆくみづにかずといひならはせるなり。

またおとこ、

行水と過るよはひとちる花といづれまててふことを聞らん

あだくらべかたみにしける男女の忍びありきしけるこ

と成べし。

一此歌は女をあだなりとうらみて、とりのこ、櫻の歌をよめば、女もまたおとこのあだなる事をいはんとて、あさ露ゆく水のうたをよみて、いさゝかもまへる心もなければ、又なりひらのうたに、行水過るよはひちる花、いづれもまてといふ事をばきかず、とゞまらぬ物なれば、そなたのあだ心もなをるべからず、ぜひにおよばずといひなしたる歌也。三躰詩に、日々かゑんに水（へん）のながるゝを見る、春をいたましむる事いまだやまざるに又あきをかなしむ。またいはく、げんしやうにちやとりうしさる、しうじんのためにとゞまる事しばらく時もせず。此心なるべし。

(五一)

むかし男、人のせんさひに菊うへけるに、

うへしうへば秋なき時やさかざらん花こそちらめねさへかれめや。

一うへしうへばとは、かさねことば也。しはやすめじ也。月日のあらんかぎりは、春秋といふ事たゆべからず、この花はちるともねはかれずして、かぎりなき秋とともにさくべしと也。天台のしやくにも、花はちるゝ常住とあれば、花のちるはふしうきにあらず、千秋萬歳の心ふかし。もつともおもしろき歌也。

(五二)

むかしおとこありけり。人のもとよりかざりちまきをこせたりけるかへしに、

あやめかり君はぬまにぞまどひける我は野にいで、
かるぞわびしき

とて、きじをなんやりける。

一拾遺の詞書にも、ちいさきかざりちまきを山すげの籠に入てとあり。ちまきをあやめにてする事はなけれども、けふは菖蒲をもてあそぶ日なればかくよめる也。ぬまにまどふとは、かなしき心にあ

(五三)

らずあそびまどふ事也。古今の序に、あるは花をそふとて、しるべなき所にまどひとと有。此心也。
(と)
扱下の句に、我は野にいでゝかるぞわびしきとは、こなたはそこはかとなき野に出て、かりばに心をつくしたるがはかなきよといふ心也。なをころ有べし。

むかし男、あひがたき女にあひて、物がたりなどするほどに、鳥のなきければ、

いかでかは鳥のなくらん人しれず思ふ心はまだ夜ふかきに

いいかでかはとりのなくらんとは、あひがたき人にあいて、物語の嬉しさに、夜のふくるをも覺えず、あかつきの鳥のねを是はなにとてなくぞと、がめたるあはれさ、かぎりなき歌也。時をかんじては花も泪をそゝぎ、わかれをうらみては鳥も心をうごかすといふ心也。又古きごに、りせいまつ

夜は三ぜんざい逢夜はざんじ一ろうのかね、此心成べし。

(五四)

むかし男、つれなかりける女にいひやりける、
行やらぬ夢路をたどる袂には天津空なる露や置らん。

一歌の心まことにあはれ也。行やらぬとは、そなたにとゞまらず、わが身にもかへらぬ玉しゐの事を、行やらぬ夢路をたどるといへり。その袂はあまつ空なる露や置らん、但いかなる露にてか有らむといふ心也。露やのやもじは、とがめたる心とするべし。天福の本には、夢路をたのむとあり。後せんには、あまつ空なきとあり。何もをなじ心か。引歌古今に、思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路にあふ人のなき、此歌の心と同じ。

(五五)

むかし男、おもひかけたる女の、えうまじう成ての世に、

おもはずはありもすらめどことの葉のおりふしこと
にたのまるゝ哉

一歌の心は、そなたには我が事をおもわずあるらめど、こなたには、まへゝちぎりしことを、さりともしれ給わじと、おりゝおもひいでゝたのまるゝと也。古今に、よしの川よしや人こそつらからめはやくいひてしことは忘れじ、このうたの心なり。

(五六)

むかし男、ふして思ひおきておもひ、思ひあまりて、
我袖は草のいほりにあらねどもくるれば露のやどり成けり。

一うたの心あさゝとうちきこへたるやうにて、又こゝろふかき歌也。くるゝの字かんじん也。露はくるれば草木にふかむる物也。我袖は草にはあらねども、おもひゆへ、かくのごとくとよめり。又一せつにいはいく、なり平の思ひ、心になわざれ

ば、くさのいほりをもむすび、世をたちはなれんと思ふに、そでははや草のいほりにこもりたるやうに、露ふかきよど、心のあらましにおもひたぐへてよめる心ともいへり。此義もつともおもしろし。此次のだん／＼だうしんのことをかきあらわせり。

(五七)

むかしおとこ、人しれぬ物思ひけり。つれなき人のもとに、

戀わびぬあまのかるもにやどるてふ我から身をもくだきつる哉。

一此段詞書別義なし。こひわびぬの五もじかんじん也。年月さま／＼の事を思ひ、身をつくし心をつたましめることを、扱もよしなき事を戀わびぬといひすてたる五もじ也。かひさうに、我からと云虫有也。我が心からせんなき物をもひしよといはん爲に、もにすむ虫の我からとつゞけたるなるべ

し。

(五八)

昔心つきて色このみなる男、ながをかと云所に家作りてをりけり。

一心つきてとは、なりひらの思ひに心をつくしてはや世中をむやくにおもひ、いかなるあんじつにもとおもへる比なるべし。又いはく、心つきて色このむとは、おとなしき心つきて色このむと云義也ともいへり。是はことばのつゞきまさりたるにやあらんと仰られし也。

一ながおかといふ所に、くわんむの皇女あまたまします所也。父あほうしんわうも、このながをかにましますとなれば、なり平いへづくり給わん事もつとも也。

そここのとなりなりける宮ばらに、こともなき女どもの、あな成ければ、田からんとて、此男のあるを見て、いみじのすきものゝしわざやとて、あつまりてい

りきければ、此をとこにげて、おくにかくれにければ、女、

あれにけりあはれいく世のやどなれや住けん人のをとづれもせぬ

といひて、此宮にあつまりきゐてありければ、此男、むぐらをひてあれたるやどのうれたきはかりにもものにすだく成けり

とてなん出したりける。

一このだん皆はいかいていといへり。そのとなり成ける宮ばらにとは、みやたちのおほき所をみやばらと云也。こともなき女どもは、しさひなき女どもとほめたることば也。源氏こてふのまきに、にしのたいの姫君、こともなき有さま、おとゞのわざと覺しあがめ聞え給ふとあり。是も玉かつらをしさひなく、なんなき人とはめたることば也。

其外あまた所にあれども、これをりやくす。

一くわんむの御子、たかつ内親王、じゅんし、かう(高志)

し、けいし、仲野なかのの内親王など申て、あまたをします。そのめしつかはるゝ女房たちなり。次のことば、お中なれば、田からんとは、業平の家作りを見んためにたはぶれていへることば也。又しづが田をからんをみんといふ詞ともいへり。

一いみじのすき物のしわざやとは、業平のすみかをほめて、その宮へあつまり來たる也。それを業平むつかしくおもひてかくれし程に、女房達、なり平にあたりてよめる也。すみける人のをとせぬは、あれて幾世になれるやとぞと、此宮をあざむきてよむ心也。古今第十八、よみ人しらずのうた也。次のことば、あつまりきてとは、あつまりきている也。其時をとこの歌、むぐらをいてあれたるやどゝは、女のあれにけりとよめるをうけて、まことにむぐらをいてあれたるやど也。かやうの所うれはしきは、かならずおにのあつまるなりとよめり。すだくとは、あつまるといふしうの

字也。拾遺に、たいらのかねもりが歌に、みちのく
のあだちが原のくろづかにおにこもれりといふ

はまことか、是はわうしう、なとりのこほり、くろづかと云所に、重ゆきがいもうとあまたあるときいて、かねもりがよみて遣す也。女のことををにといふとみへたり。りうまう大じのせいぐわんにも、女はぢごくのつかひ、よく佛のたねをたつ、ほかのおもてはばさつにゝて、ないしんはやしやのごとし。しかれば則我がもとにおいてはまなこに女人をみざれとあり。

この女ども、ほひろわんといひければ、

うちわびておちぼひろふときかませば我も田づらにゆかましものを。

一是もはいかいてい也。そなたにおちぼひろふならば、我も田づらに同心せんものと成、猶に傳あるべき也。

(五九)

むかし男、京をいかゞ思ひけん、ひんがし山にすまんとおもひて、

住わびぬいまはかぎりとし山里に身をかくすべきやどもとめてん

一まへにも京やすみうかりけんとあり。業平人をうらみ世をうらめしく思はるゝ時分か、歌の心はあきらかなり。後撰にも、なりひらとありて、つまきこるべきとあり。俊成卿、兩せついづれをももちい給へるとみへたり。俊成、住わびて身をかくすべき山里にあまりくまなき夜半の月哉、同、今はとてつま木こるべき宿の松千世をば君となをいのる哉。

かくて物いたくやみてしに入たりければ、おもてに水そゝぎなどして、いきいでゝ、

我うへに露ぞ置なるあまの川とわたる舟のかひのしづくか

となんいひていきいでたりける。

一物おもひびやうきとなるにや、たへ入たる也。おもてに水そゝぎなどして、いきかへりたる事、れいすいしやめんらんすいしやうごと法華にもあり。歌の心は、かくすゞしき水をそゝぎていきいでたる事、よのつねの水にはあらじ。七夕の天のかわをわたるかいのしづくにてあるらんと也。又古今には、此歌の心別也。

(六〇)

昔男有けり。宮づかへいそがわしく、心もまめならざりける程の家とうじ、まめに思わんといふ人につきて人の國へいにけり。

一宮づかへとは、てう家の御ほうこういとまなき也。さるによりて、家をもかへりみず、女にも念比なかりし事を、心もまめならずといへり。家とうじとは、女あるじ也。まめに思はんといふ人につきてとは、さやうにひとりずみのやうにてあらんよりは、しんじつに思ふ人のかたへありつけん

など、中だちの云に付て、也國へゆきたる也。

此をどこ、宇佐のつかひにていきけるに、有國(祇承)のしさうのくわん人のめにてなんあると聞て、女あるじにかわらけとらせよ、さらずはのまじといひければ、かわらけ取ていだしたりけるに、さかな成けるたち花をとりて、

さ月まつ花たちばなのかをかげば昔の人の袖のかぞする

といひけるに、思モイひいでゝあまに成て、山に入てぞ有ける。

一字佐のつかひとは、ていわう御そくゐあれば、かならずうさ八まんへほうべいをたてらるゝ也。そのほかに、ゑいりよにかゝらせまします事あれば、宇佐八まんへ御たづね有て、神ちよくにまかせ事をさだめられし也。上古はうさ八まんも、ちよくしなどには詞をかわし、ことをそうし給ふ事あるを、かうけん天王御時、ゑみのをしかつ、だ

うきやう法師が事にて、ていわうの御心みだりがわしくて、和けのきよ丸をあしぎり給いし事あり。それより八まんちよくしにものゝ給ふ事をやめ給いし也。うさの御つかひ、上古にはわけうぢの人にさだまりたるを、清丸より後は、御つかひかわりたるにや、清和天わうの御ときは、なりひらちよくしにたち給ふとあり。

一しそのくわん人とは、國(府)うにありて、ちよくしをまかなひ奉る物也。彼業平にありしおんな、その官人のめにて有と聞給いて、女あるじにしくとらせよといへり。ちよくしの御事なれば、いながみがたくて、きうじなどにいだししたると云事を、かわらけ取ていだすといへり。

一さかななりけるたち花を取てとは、つくり花にてもあるべし。さ月まつ花たちばなとよめるは、たち花はかならず五月にさく物なれば、さつきまつとまくらことばにいへる也。下の句に、むかし

人の袖のかとよめるは、昔見し人にてはなきかといへる心也。かの女是をはづかしく思ひ、いにしへのことなどおもひいでゝ、すなはちあまになり、山にかくれ入たると也。まことにあはれふかるべし。又いはく、たちばなにむかしを忍ぶ袖のかなどよみならわせる事は、いづれの御代にか、とこよの國へたち花をとりにつかわす。そのちよくし、いまだきらくせざるに、御門ほうぎよなりぬ。ちよくしこれをあへなきことにおもひて、袖につゝみきたりたるたち花を、三ツかのみさゝぎにそ(な)へたりければ、をひいでたるたちばなのにほひ、ありし御衣の御袖のかほりにすこしもかわらざりけると云、ふるき物語あり。是に仍たちばなには、袖のか、むかしをしのぶなど云事、歌にもよみ、れんがにもつけならはせる也。

(六一)

むかし男、つくしまでいきたりけるに、これは色この

むといふすき物と、すだれのうちなる人のいひけるを
聞て、

そめ河をわたらん人のいかでかは色になるてふこと
のなからん

一これも宇佐のつかひの時のことか。すだれのひま
よりなりひらを見て、あれこそ色このむといふす
き物よと云を聞也。簾の中の人、たれともなし。
歌の心は、ちくぜんにそめ川といふ名所あり。そ
め河をわたりてきたるほどのものが、色にならず
はあるべからず、尤さやうになくてはとそれにな
りてよめる也。

女返し、

名にしおはゞあだにぞあるべきたはれ嶋なみのぬれ
衣きると云なる。

一此歌は、業平のもちらん色このみなりとよめる
を、又おさへて、さやうに詞にいだして色このみ
成との給はゞ空ごと成べし。たはれ嶋をよ所より

見れば、しらぎぬきたるやうにみゆれど、まこと
はなみのよせかへりて、しらぎぬのやうに見ゆる
也。そなたも人の云やうに、しんじちのかうしよ
く人にてはあるべからずとよめり。ひごの國に風
流嶋と有。後撰第十五、朝綱朝臣の歌に、まめな
れどあだ名はたちぬたはれ嶋よる白浪をぬれぎぬ
にして、同敷第十九、讀人しらず歌、名にしをは
ゞあだにぞ思ふたはれ嶋浪のぬれ衣いくへきつら
ん。此歌は物語の歌と大略同。すこしかわれる
也。

一ぬれぎぬといふ事は、人のなき名をひたる事をい
へり。其いはれは、むかしちくぜんの國に、ある
人のむすめ、はゞにをくれて、父ひとりにやうゆ
くせられていたり。父またはじめて女をむかへた
るに、この女もむすめひとりもちてきたれり。父
は我むすめの母なき事をいたわりおもひて、心そ
ふる事あながち也。けい母これをにくみて、いか

にせんと思ひわづらひ、あまおとめをかたらひよせて、おもふしさひあり。なんぢがしほたれ衣我にかせ、あしたまたつとにきたりて、我ぬれ衣をほしをきたれば、此屋のうちへ取入給へと也。返し給へるむくつけく、いへ、しさひある事ぞとて、物とらせたれば、すなわちもてきたり。扱女のをしへしやうにあしたきたりて、我がぬれぎぬをこの屋のうちへとらせ給いて候と、さも心なきあまごろものひとへになき名をいひつけたり。まゝこのやまひしたりけるつぼねのうちよりとりいで、あまをとめには是をかへす。そのち女此事をひそかにおとこにかたる。男是を聞て、さてもくちおしきことかな、我子とおもひてもなに、かわせんとして、人にしらせず此むすめをがいしすてたり。父此事おもひと成て、よるひるこれをうらみいたるに、あるよの夢に、彼むすめきたりて、父にむかひて、さめぐとなきて、一首の歌をよ

めり、ぬぎきするそのたばかりのぬれぎぬはながき泪のためし成けりといひすてゝかへると思へば、夢もさめぬ。此物語より人のなき名おひたる事をぬれ衣きるなどゝいひならはせり。哀成物語なり。

(六二)

昔年比をとづれざりける女、心かしこくやあらざりけん、はかなき人のことに付て、人の國なりける人につかはれて、もと見し人の前に出て物くわせなどしけり。

一とし比をとづれざるとは、さきのだんにありしごとく、業平宮つかへいとまなくて音づれざる也。心かしこくやあらざりけんとは、たとへなりひらうとくしくとも、けん女ならば、さはあるまじきを、中だちなどのすかしいふ事をまことゝおもひて、人の國へ行しが、業平其やどにたびねし給へば、いでゝきうじなどしたる事を、物くわせな

どしけりとかけり。もと見し人とは、なりひらの事也。ことに付てとは、人のことばにつきて也。

よさりこのありつる人たまへとあるじにいひければ、おこせたりけり。男、我をばしるやといひて、

いにしへの匂ひはいづら櫻花こけるからとも成にける哉

といふを、いとはづかしとおもひて、いらへませでゐたるを、などいらへませぬといへば、泪のこぼるゝにめも見へず、物もいはれずといふ。

一此だんかくれなし。業平の見しりて、我をすて、いにし女なれば、うらみをかたらんとて、よさりこの人いだしたまへと云也。ちよくしの仰なれば、せひにおよばず、おこせたるに、なりひらのいはく、我をば見しりたるか、我もはやおとろへて、花などをこきちらして、いにしへのにほひはすこしもなければと、我身の事をよみ給へる歌なるを、女は我事をの給ふと聞て、なみだにむせ

び、物もいわれざる也。など返事をせぬぞとひ給へば、なみだにくれて物もいはれずとて、なきいたるさまあはれるべし。

是やこの我にあふみをのがれつゝ年月ふれどまさりがほなみきイ

と云てきぬゝぎてとらせけれど、すてゝにげにけり。いづちいぬらんともしらず。

一中將いしやうをぬぎてとらせ給へども、とるにもおよばずにけていにし也。いづちいぬらんともしらずとは、夫よりその家にもあらず、世をいとひ身をかくしたる也。誠にあはれふかし。此歌の五もじ、これやこのとは、是は此人にてはなきかととふ五もじ也。次のことば、我にあひそふべき身を心おさなくて、わがてをのがれてと云事を、我にあふみをのがれつゝとよめり。されど年月をへたれば、ものゝことわりをもしり、我をあわれと思ふ心やまさらんと思ひてあれば、すこしもその

けしきなしと云事を、年月ふれどまさがほなみ
とよめる也。

(六三)

むかし世心つける女、いかで心なさけあらんおとこに
あひゑてしがなと思へど、いひいでんもたよりなさ
に、誠ならぬ夢がたりをす。子三人をよびてかたりけ
り。ふたりの子は、なさけなくいらへてやみぬ。さぶ
らふ成ける子なん、よきおとこぞ出こんとあはする
に、此女けしきいとよし。こと人はなさけなし。いか
でこの在五中將にあわ(せ)てしがなと思ふ心有。

一世心つけるとは、世中のことをもしり、好色の儀
にも馴たる心也。なさけあらん男にとは、業平に
心をかけたり。されどかくといふべきやうなけれ
ば、子ども三人をよびて、見ぬ夢を見たりとかた
る事を、誠ならぬ夢がたりとはいへり。二人の子
は、にあわざる事などいひて取あはざる也。さ
だめて業平にあひたりなどかたる夢なるべし。さ

ぶらうなる子、かうくにて、よきやうにあはせ
たれば、はきげんよかりしといふ事を、けしき
いとよしといへり。

かりしありきけるにいきあいて、道にて馬の口を取
て、かうくなんおもふといひければ、あはれがりて
きてねにけり。扱後男見へざりければ、女をとこの家
にいきて、かいまみけるを、男ほのかにみて、

もゝとせに一年たらぬつくもがみ我をこふらしおも
かげにみゆたち

とていでたつけしきをみて、むばらからたちにかゝり
ていへにきてうちふせり。

一此だんよくきこへたり。こと人はなさけなしと
は、さぶらふが心也。あに二人はふかうなれば、
我いかにもしてなりひらにあわせたきとおもひ、
かりばへ出らるゝ道にて、此事をいひし也。なり
ひら、あわれにをもひて、一夜は來たり給へど、
またとひ給わねば、女あこがれて、なりひらの家

にいきてのぞきみたるさま也。時になりひら、是

を見付給いての歌也。もゝとせにいとせたらぬとよめるは、かならず九十九といふ義にはあらず、やうゝもゝ年ばかりなる人が、我をこふるよと、きやうげんによめる也。つくもがみとは、いかにもおちほそりたるかみの、もなどをつらねたるやうに見ゆるを、つくもがみといへり。おもかげにみゆとは、たしかにその人とは見給へども、それとはいはず、我を思ふやらんおもかげに見ゆるとよめり。まことに心ふかし。女是を聞、本だうをもゆかず、やぶわらなどをくゞりてにげ行ていを、むばらからたちにかゝりてといへり。

男彼女のせしやうに忍びてたてりてみれば、女なげきてぬとて、

さむしろに衣かた敷こよひもや戀しき人にあわでのみねん

とよみけるを、男、あわれと思ひて、その夜はねにけ

り。

一中將、あわれにおもひて、女のもとへいきて、たちきゝたれば、女なげきてぬとて、歌をよめり。ぬとてとはぬるとて也。古今に、つれもなき人やねたく白露のをくとはなげきぬとは忍ばぬ、歌の心別儀なし。まちなげくさまきこへたり。古今第十四にあり。下の句かわりたり。さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらんうぢのはしひめ。世中のれいとして、おもふをば思ひ、おもわぬをば思わぬ物を、此人は思ふをも思わぬをも、けちめみせぬ心なん有ける。

うたのことばあきらか也。けちめとは、ものゝはかち也。ゆいめなど云心か。しるしと云、けんの字也。源氏物語のげんないし、是にゝたり。

(六四)

むかし男女イ、みそかにかたらふわざもせざりければ、いづくなりけんあやしきによめる、

吹風に我身をなさば玉すだれひまもとめつゝいるべき物を

一みそかにかたらふわざとは、忍びておとづれをもせざるなり。いづくなりけんとは、いかなりけんの心也。歌の心は、我身をかせになさば、いづ(こ)へ成とも入て見るべき物をと也。はつげじんりきはん法華神力品(如風於空中、一切無障礙)に、によふうおくうちう一切無しやうげの心也。返し、

とりとめぬ風には有とも玉すだれたがゆるさばかひまもとむべき。

一ひまもとめつゝいらんとあるをおさへて、たますだれのひまも、こなたゆるさずは、なにとしてもとむべきとよめるなり。

(六五)

昔おほやけおぼしてつかうたまふ女の色ゆるされたる有けり。おほみやすん所とて、いますかりける。いとこ成ける殿上にさぶらひける在原なりける男の、まだ

いとわかゝりけるを、此女あひしりたりける。

一おほやけおぼして色ゆるされたるとは、せいわ御てうあひにて、いましめの色をゆるされて、あやおりものをちやくする也。ゆるし色は大臣のむすめなどちやくすると見へたり。きんぴせうにくわし。女御なども三おい上にゆるさるゝと見へたり。

一あり原成りける男は業平也。あいしりたるとは密通の義也。

男、女がたゆるされたりければ、女の有所にきてむかひをりければ、女、いとかたはなり、身もほろびなん、かくなせそといひおりければ、

思ふには忍ぶる事ぞまけにけりあふにしかへばさもあらばあれ

といひて、ぎうしにおり給へば、れいの此みぎうしには、人の見るおもしろでのぼりければ、此女思ひわびて、さとへ行。されば何のよきことゝおもひていきか

よひければ、皆人聞てわらひけり。

一女がたゆるされたるとは、忠仁公のからいの人なれば、わらはよりそめどの、御かたへめしつかはるゝ也。かたはなり身もほろびなんとは、業平のあまりしたしきさまなるは、見ぐるしき事、女のきずになるほど也。身もほろびなんとは、そなたも我もといふ義也。此文字かんようと師傳也。歌は業平也。心は、君の御ためわがためなれば、ずい分忍び侍れども、あさからざるおもひにはしのお心まけ侍る也。よしや身も命もあふ事にかへば、さもあれをしからずとうちふてたる儀也。

一さうしに折たまへばとは、女のみつぽねへ折給也。次のことばに、人の見るをしらでとは、業平人めをまはぐからず、女御のましますみつぽねへ行かよふ也。しかれば女御、うるさくおぼしてさへ出給ふとなり。

一なにのよき事と思ひてとは、たよりよき事とおも

いて、女御のまします御さとへ忍びてかよふなり。つとめて、このもづかさの見るにくつは取ておくにかけ入てのぼりぬ。

一つとめては、かの御さとよりあさどくかへりて、このもづかさの見るに、くつをてづから取てかたはらへなげ入、こよひはてん上にさぶらひたるていしてのぼりいらるゝ也。

一このもづかさとは、殿上の事をつとむるつかさ也。其身だう上をせざるゆへに、女じゆとて、女をしたてゝいだし、てん上の事をやくさする也。

一殿上には眞首まごしらをはじめ、中將少將、五位六位の人くつねにとのいせらるゝ也。

かくかたはにしつゝありわたるに、身もいたづらに成ぬべければ、つゐにほろびぬべしとて、この男、いかにせん、我がかゝる心やめたまへと、佛神にも申けれど、いやまさりにのおおほへつゝ、なをわりなく戀しうのみおほえければ、おんやうじ、かななぎよびて、

こひせじといふはらへのぐしてなんいきける。

一此一だんあきらか也。かたはにしつゝとは、見ぐるしくしなしつゝ也。いかにせんと思ひわび、かななぎおんやうじなどにいひあわせて、戀せじを
もわじなどゝ身をこらすてい也。

はらへけるまゝに、いとゞかなしき事かずまさりて、ありしよりけにこひしくのみおほへければ、

戀せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずも成に
ける哉

といひてなんいにける。

一此歌は、古今第十一、讀人しらずの歌也。不逢戀に入たり。下の句、神はうけずぞなりにけらしもと有。歌の心はあきらか也。神佛につけていのれども、戀しさのいやまされば、神はうけず成にける哉と治定して侘たる歌也。あわれふかし。新古
今戀のふに、わすれなんとおもふ心(あらん)のつくからに(うたがひに)
ありしよりけにまづぞ戀(悲)しき。ていかの卿、祈に

不逢戀に、行めぐりあふせもしらぬみそぎ河引かな
しきことはかずまさりつゝ、同戀せじとせしみそ
ぎこそうけずともあふせはゆるせかも(河渡)のみづか
き。

この御門はかほかたちよくをはしまして、佛の御名を御心に入て、御こゑはいとたうとくて申給を聞て、女はいたうなきけり。かゝる君につかうまつらで、すぐせつたなくかなしき事、此男にほだされてとてなんなきける。

一此御門といふより又はじめてとよむ也。だんにてはなし。ていかかんぶつに、せいわてんわうはおうけんのあそび、ぎよれうのたのしみに、いまだかつて心をとゞめ給わず、ふうしはなはだたんどんにして、しんせいのごとしとあり。かくのごとくにかりなどし給はで、佛ばうに御心をかけさせ給也。おうけんとは、たかいぬのあそび也。ぎよれうとは、うをなどのすなどり、ふうしたんごん

にしてとは、御かたちいくしく、しんせいとは、かみなどの生れ給ふかと、清和天皇をほめたることば也。

かゝる程に御かど聞見つけて、此男をばながしつかはしてければ、この女のいとこの宮す所、女をばまかでさせて、くらにこめて、しばらくたまふければ、くらにこもりてなく、

天のかるもにすむ虫の我からとねをこそなかも世をばうらみじとなきをれば、

一此だんだかた聞へたり。なりひら女御へ逢道の義、みかど聞めして、業平をながし給ふにや、ただしなりひらるざいの義國史にはみへず。御かどより御せつかんにて、るざいのさたなどありしはいふにや、とかくつくり物がたりなれば、そのせむさくにおよばず。さうしにながしつかはすとあれば、それにして見給ふべき也。次のことば、い

とこの女御とはそめどの也。女をばまかでさせてとは、だいをばたいしゆつありて、そめどの、御かたにおきまいらせ、御せつかんある事をしをり給とかけり。くらにこめてとは、ぬりごめなどのうちなるべし。女の歌に、あまのかるもにすむ虫とは、此歌序歌也。あまのかるもといふ海草に我からといふ虫あり。うき事もかなしきことも、我心からなす事なり。世をもうらむべきことにあらずと也。これおもしろきうた也。ばんみんのをしへなるべし。

この男人の國より夜ごとにきつゝ、ふへをいとおもしろく吹て、こへはおかしうてぞあはれにうたひける。一此だんだ人の國よりと有は、まだみやこのかたわらしのびてあれども、るざひせよなど、かねせんじのあれば、るざひのぶんにてかけり。わうだうを、もんじたる義なるべし。

かゝればこの女は、くらにこもりながら、夫にぞあな

るとはきけど、あひ見るべきにもあらでなんありける。

さりとともと思ふらんこそかなしけれあるにもあらぬ身をしらずして

とおもひをり。

一 此歌女の歌也。業平のさりととも我にあわんどや思ふらん、我身は此世にあるにもあらぬていなるものをといふ心也。

男、女しあはねば、かくしありきつゝ、人の國にありきてかくうたふ、

いたづらに行てはきぬる物ゆへに見まくほしさにいざなはれつゝ。

一心はあきらか也。此歌、古今第十三、よみ人しらずとあり。されども人丸の歌也。業平、只今の心におなじき程に、爰にてうたひけるにや、詠吟なり。

水のをの御時なるべし。おほみやすん所もそめどのゝ

きさき也。五條（の）きさきとも。

一 水のをの御時とは、せいわの御事也。水のをとほあたごのほとり也。此所に御むろ有。すなわちみはかも此所にあると也。五條のきさきはそめどの也。またふゆつぎの御子、じゆんしをも五條のきさきとも申。夫は仁明のきさき也。人のまぎるゝこと也。